Fragments of memorise

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆｒａｇｍｅｎｔｓ　ｏｆ　ｍｅｍｏｒｉｓｅ

【Ｎコード】

Ｎ１７７５Ｃ

【作者名】

ルナ

【あらすじ】

過去の約束。一人の転校生の登場で、忘れられていた記憶がよみがえる。その時少年はいかなる決断を下すのか！？愛と友情の？学園ラブストーリー。いかなる終幕を迎えるのか！！

第1話：プロローグ

一片の花びら。それは足元まで落ちて消えていく。また一枚。そしてもう一枚。
目に映るのはピンク色の景色。幻想的にも見えるが、それはまるでピンクの絵の具をこぼしてしまったかのようでもあった。
ここがどこで、今自分が何をしているのかもわからない。
何か大切なことをしなければいけない気はしているのだけど、それが何かはわからない。

『約束だよ』

不意に耳に飛び込んでくる誰かの声。幼さの色濃いその声に、どこか懐かしさを感じる。

『二人の約束』

再び聞こえる声。今度はさっきよりも鮮明な声だった。
だけどわからない。これが誰の声なのか。そして自分がどこにいるのか。

『きっとだよ』

三度聞こえた時にはすでに目の前の色は真っ黒になっていて、自分の存在すらもあやふやで、
ただ深い闇に落ちていくのみだった。
落ちていく途中にひとつだけわかったことがある。その声が、女の子の声だったということだ。

「…またこの夢か」

心地よい目覚めとは程遠い感覚の中目を覚ます。今まで眠っていたはずなのに、ちっとも疲れがとれた気がしない。
目覚ましを見ると時刻は午前6時ジャスト。いつも起きる時間から1時間半も早い。
寝なおそうかとも思ったが、一度覚醒してしまった脳は眠ることを拒否してしまったようだ。
仕方がないのでベッドから重い体を引きずり出す。わずかに朝日がこぼれているカーテンを全開にし、体にその光をいっぱいに当てる。
いい朝だった。春のうららかな陽気に心地よい風。鳥のさえずりも何もかもが。
ただひとつを除いて……

「約束って何だよ……」

物語は今、幕を開ける。

〜第一話〜

微妙な後味の悪さを感じつつ、いつもより早めのリビングに足を踏み入れた俺を出迎えた最初の一言は、

「どうしたの！こんなに早く？風邪でもひいた！？」
「風邪引いたらこんな早く起きないだろう……」

二度寝を断念し、いつもより早く起きだしてみればこれだ。
そりゃ確かにいつも寝起きが悪い俺が、こんなに早く起きてくれば驚くのも無理もないかもしれない。
だけどさ……もう少しリアクションの仕方ってもんがあると思うんだよな。
突っ込もうかとも思ったが、これ以上何かを言われるのも嫌なのでそのまま自分の定位置であるテーブルに座ることにする。

「本当にどうしたの？まさか本当に風邪？」
「かわいそうな人を見るような目で問いかけるなよ……」

最後の方には本気で心配している我が母親に対して、こんなときはどんな返答をしたらいいんだろうな？
知っているやつがいたら教えてくれ。

「まあいいわ、起こす手間が省けて良いし」

結論はそうなったらしい。結局そこなのかとも思ったが、下手なことを言って明日から起こしてもらえなくなっては困る。
あくまでも今日が早いのはたまたまなのだから。
だけどまぁ、早く起きるのも考え物だな……。そんなことを思いながら、用意されたハムエッグに箸をつけるのだった。

俺の名前は水野香介。ごく平凡な高校生だ。身長も高くないし顔も普通。成績も運動神経も何もかも普通。これってある意味すごいのでは？とかもたまに思ったりもする。
家族は俺と母親の二人だけだ。父親はまだ俺が小さいころに交通事故で死んだと聞いている。
実際のところ、まだ物心つく前だったので、父親についてのことは

全部伝聞情報だ。
そのおかげで片親だということに、違和感を感じないのだから不幸中の幸いってやつかもしれない。
以上、簡単な説明終わり。簡単すぎるって？これ以上説明することなんて何もないって。

「じゃあ、そろそろ行ってくる」

寝起きの悪い俺だ。当然のように遅刻も多かったりする。まぁ、俺としては全然気にならないのだが、成績表を見た母さんの顔が気になるんだよな。
この前の顔は真剣にトラウマものだ……
そう思い早めに家を出ることにしたのだが、

「今日は雨が降るかもしれないわね…」

つまるところ、早かろうが遅かろうが何かを言われる運命らしい。
自分の招いた事とはいえ、一抹の悲しさを背中に背負いながら玄関の扉を開けるのだった。
太陽が眩しいぜちくしょう。

第1話：プロローグ（後書き）

初投稿ということで、短いですがこれからよろしくお願いします！
！

第2話：幼馴染

～第２話～

今日の天気は全国に快晴だそうだ。たしか出る前に見たニュースでそんなことを言ってたような気がする。
発達した高気圧が日本列島を覆っているだとか……

「雨が降るはずないだろうが……」

母親に言われた一言に改めて突っ込みを入れてみる。むなしいだけなのだが……
空を見上げてみれば雲ひとつない。無駄に眩しい。その上暑い。不快なことこの上ない。
今を何月だと思ってやがる？４月だぞ！？春なんだぞ！？
春ってのはもっと過ごしやすいものだというのが昔からの決まりじゃないのか？

「憂鬱なことこの上ない……」
「何朝から暗い顔してるのよ！？」

いつ隣に並んだのか、人の一人ごとに勝手に突っ込みを入れてきやがるこいつは京本瑠璃。
俺の幼馴染だ。
少し茶色っぽい髪をショートに切りそろえ、大きな目をらんらんに輝かせている様は男にしか見えん。
ボーイッシュなどという言葉もあるが、こいつの場合は男と比べても遜色ないのではないだろうか？

「お前みたいに朝からテンションあげてたら午後までもたないんだよ」
「情けないわね～。ちゃんと朝ごはん食べてきたの？」
「おかげさまでな」

まったく、いちいちうるさいやつである。どうしてそう人の世話を焼きたがるのか？はなはだ疑問である。
そのくせこいつは見た目どおりなのか？やたらと強い。
昔から男子ともよく喧嘩をしていて、しかも勝ちやがる。それが高校に入り空手なんぞをはじめやがったのだ。
おそろしくて近寄るのもためらわれるね。

「それにしても、香介がこの時間に登校してるなんて珍しいわね」
「ブルータス、お前もか……」

こいつと俺との仲がそんなものかはおいといて、母親に続いて瑠璃にまで言われると、やはり少し悲しいものである。
そんな風に思われるとは……

「そう言われたくなかったら、毎朝早く起きることね」
「うるせえよ…」

ここまで言われると、さすがに少し早く起きる努力をしようかな？な～んて思ってもみてしまうが、おそらく起きれやしないだろう。
そんな簡単に起きれるならとっくに起きてるしな。

「ほら、早く行くわよ！！」
「おう…」

瑠璃に促されるままに学校にむけて歩き出す。

やれやれ、せっかく早く起きたのにろくなことがないぜ……
全部自分のせいだとわかっていながらも、そう思わずにはいられなかった。

自宅から徒歩で２０分くらいの小高い丘の上にある学校。
俺が通う、私立晴嵐学園だ。
私立の割には学費がそれほど高くなく、設備の面でもそこらの学校とは雲泥の差の充実性を誇っている。
そのため毎年志願者数が異様に多く、合格には相当の実力、ともに運が必要になってくる。
運ってのは俺の意見によるところが多いけど、気にしたら負けだ。
俺としては、家から近く、更に学費も安いこの学校にぜひとも入学したかった。
朝、遅くまで寝てられるという利点もあるし、何より片親でただであえ苦労の多い母親の負担を軽減しようと思ったからだ。
そんなこと絶対に言わないけどな。なんか照れくさいし……
しかし現実は甘くない。俺の成績は芳しくなく、ここに入るには多大な努力があったことも事実である。
まぁ、俺の武勇伝はいつか語るとして、とにかく1年前に無事に入学できた次第だ。

「入学してから、もう1年か…」
「そうね～。光陰矢のごとしってやつかしら」

年寄りくさい……。なんてつぶやいてみたら、なんと左ハイキックがとんできやがった。
一応女子でスカートなんだから、せめてローキックにしとけよ。
突っ込むところが間違っているような気もするが、まぁいいさ。

「にしても、少し早く着きすぎたな」

そんな風に話していると（俺が瑠璃に襲われながらとも言うな）あっという間に学校につおてしまった。
時計を見れば午前８時少し前。ＨＲは８時半。いくら何でも早すぎるだろう……
やっぱり家でもう少しゆっくりするべきだったか？

「香介が早く起きるからこんなことになるのよね」
「なんでさっきから全ての原因が俺に帰結する……」
「そうしておくのが一番まるく収まるじゃない？」

収まるわけないだろうが。そう感じているのはお前だけだ。

「さて、ここでこうしてるのも時間の無駄だしね。ついてきて」
「ちょっと待て。どこに行くつもりだ？」
「来ればわかるわよ」

それだけ言うと、とっとと歩いていってしまう瑠璃。しっかり俺の腕を掴んで……
行くなら一人でいけばいいものを。
そう思いつつもついていく俺は、結局はお人よしなんだよ。言っとくけど瑠璃が怖いんじゃないからな？

第2話：幼馴染（後書き）

2話目アップです。まだ序盤ということで、なにとぞ長い目で見てやってください。

第3話

～第３話～

目を奪われるってこういう時のことをいうんだろうな。
脳はそれ以外のことを考えることはできなくて、舞い散るそれをただ見ていることしか出来なくて、他には何も出来なくて。
そんな圧倒的な風景。

「ここ…は？」

目の前の風景に、発した声が若干かすれた気がする。
瑠璃につれてこられた場所は、１年間この学校に通っていた俺もまったくしらない場所だった。
それでもここは間違いなく学校の敷地内なわけで、いつも見ていた風景との違いに驚きと戸共に悔しさも感じる。
こんな場所を知らなかったなんてな。

「ここは、私のお気に入りの場所なんだ」

そう言いたい気持ちもわかる気がするね。おそらくは、ほとんど人がこないであろうこの場所。
広い草原。大きな木が作る木陰。木々の間から抜けてくるやわらかな風。
そして何より、この場所でひときわ目をひくそれ。

「綺麗でしょ？」

綺麗、確かに綺麗だ。だけどこの風景はそんな単語で終わらせるにはもったいないくらいの、そんな風景。
真っ白いキャンパスいっぱいにピンクの絵の具を溶かし込んだような、それでいてそれを見たものの目を奪ってしまうような……

「桜……だよな？」
「他に何に見えるのよ？」

疑いたくもなるぜ。なんたって目に見える範囲のほとんどが桜の木で埋め尽くされている。
その中でも中央にある桜はひときわ大きく、周りの桜を圧倒している。
呆然。人間驚き過ぎるとしゃべれなくなるんだな。貴重な体験だぜ。

「どう？ちょっとすごくない？」
「ああ……」

普段ならもう少し気のきいたこと、瑠璃相手なら多少のいやみも言えるんだけどな。今はさっぱりだ。それ以外に何も言えやしない。
そんな俺の様子に満足したのか、瑠璃もそれ以上は何も言ってこない。
まったく、すごすぎだろう。誰が何を考えて学校の敷地内にこんな大量の桜を植えたんだろうな？
まぁ、これはこれでいいさ。何しろ綺麗だからな。

「さ、そろそろ行きましょう」

ひたすらに桜を見ていた俺の耳に、瑠璃の声が飛び込む。時計を見ると、すでにＨＲ開始まで１０分ほどだ。
こんなに引き込まれるとはな……

「行くか」

名残惜しい気もしたが、さすがに遅刻はまずい。ただでさえ遅刻が多いんだから、せっかく早く学校に来た日まで遅刻しては、そのうち退学にされかれない。
また、来ればいいか。
そう思い、歩き出したその時だった。

『約束だよ』

「おい瑠璃、何か言ったか？」
「私？何も言ってないわよ？」

頭についで耳までおかしくなった？などと言ってくる瑠璃。なんてことを言ってくれるんだこいつは。

『二人の約束』

まただ。絶対に聞き間違いじゃない。
しかし、辺りを見回してみても誰もいない。そればかりか、あんなにはっきりと聞こえた声なのだが、どうやら瑠璃には聞こえていないようだ。

「何だってんだよ……」

朝の夢といい、今の声といい一体何だっていうんだ？

なんか悪い霊にでもとりつかれたかな？
そんなことを思いつつも、頭のどこかではあの声が聞いたことがあるような気がしないでもない自分がいる。
この時の俺はそんなこと1ピコグラムも考えちゃいなかったがな。
どうせだったらもっとわかりやすいヒントをくれればいいものを…
…

第3話（後書き）

短い…

すいません！なかなか文章がまとまらなくて…

次回はがんばって長くできたらと、思います。

第４話

～第４話～

俺達が教室に滑り込んだのは、結局ＨＲ開始１分前だった。
あの場所から教室までは意外と距離があり、いつものごとく走るはめになっていしまったのだ。
ま、遅刻しなかっただけましとしよう。俺は前向きな思考の持ち主なんだ。

「二人揃っての登校とは、相変わらず仲がいいな」
「たまたま一緒になっただけだよ」
「照れるなよ、別に深い意味はないさ」

やれやれ。
教室に入る早々にそんなことを言ってくる目の前の悪友。走った後にお前の顔は正直見たくないんだがな。

「だから照れるなよ」
「しつこい……」

ニヤニヤ顔をこちらに向けているこいつは七倉俊介。さっきも言ったが俺の悪友だ。
少し長めの髪をワックスでまとめ、少し微笑（俺にはにやけ面にしか見えない）を浮かべたその様は、そこらのファッション雑誌に載っていても別段不思議ではないほどだ。
実際こいつはもてる。もっともいいのはあくまで見た目だけであり、内面は破綻しているやつなんだがな。

「大体だ、周りが聞いたら誤解するような発言はやめろ」
「お前もやぶさかではないのだからいいだろう？」

売り言葉に買い言葉。こいつと話すと一向に収集がつかないのは何でだろうな？
よし瑠璃。後は任せたぞ。
俺は一足先に席でぐで～っとするから。

現在の俺の席は窓際最後尾という、教室内でのファーストクラス。
しかも我がクラスは奇数人ということもあり、俺の隣は空席。まさにパラダイスなのさ。
さてと、ぐで～っとしようかな。

「ときに水野、知っているか」
「うるさい、黙れ、顔を近づけるな」

お前の顔のアップなど見たくもない。というかしゃべるのも疲れるからどこかに行ってくれ。
そして俺をぐで～っとさせてくれ。

「四六時中そうしている奴が何を言っているのだ。それよりも聞け、耳寄りな情報だ」

おい、瑠璃はどうした。こいつに言いたいことがあれば何でも言っていいぞ。今なら俺が許すから。
その瑠璃はと言えば、すでに自分の席で友達と話してやがった。お前、何諦めたような顔してるんだよ。

「で、何を知ってるって？」

これ以上話を引き伸ばすのもあれだからな、とりあえずお前の話を聞こうじゃないか。

「実はだな、今日転校生が来るらしいのだ」

「どこからの情報だ？」

「企業秘密だな。軽々しく口にすることはできんのだよ」

お前はどこの企業に所属してるんだよと言いかけたが、実際本当に所属してそうなのでやめておく。こいつには謎が多いんだ。しかし、転校生とは珍しい。しかもこんな時期に来るなんてな。どういうことだ？

「そこまではわからん。こちらもこの情報を掴むのが精一杯だったのでな」

そうかい。そのうち捕まらないように気をつけるんだな。しかし少し気になりはするな。どんな奴なんだろうな？少しはまともな奴であってほしいのだが。

「全員座れ～」

我らが担任の登場のようだ。別にたいした人物ではないので紹介は割愛させてもらおう。強いて言うなら熱血体育教師ってところだ。それ以上の説明はないな。

いつもどおりのＨＲ……、のつもりなのか担任よ？何かを隠してるのがばればれだ。

事情がわかっている俺はいいが、他の奴らがひいてるぞ？早く転校生を紹介してやれ、でないと教師としての尊厳があぶないかもな。

まったく、やれやれだ。

第４話（後書き）

なんか、話がまったく進んでないような気がする
今日この頃…
き、きっと大丈夫ですよね～あはは…
……（逃走）

第5話

～第5話～

教室がようやくいつもの落ち着きを取り戻すにはしばらく時間をようした。
当然だ。さっきも言ったが何か隠してるのがばればれだからな。
我が担任はもったいぶった態度をしばらくとり、生徒がやきもきしてるのを見て満足したのかようやく話始めた。
なんなんだろうな、このガキのような教師は。来年はこいつ以外になることを切望するよ。

「今日はこのクラスに新しい友人が来る」

そこまでもったいつけたなら、せめて一捻り欲しかった俺だが、周りの反応は上々のようだ。
ま、古今東西、転校生というのは興味を引くからな。
七倉聞いてすでに知っている俺は何も言わずに傍観することにする。
しかし七倉の言ってたことは本当だったんだな。
あいつの情報はガセも多い。今まで何度それにはめれたことか。
だまされる俺も俺なのだが、そこのところは被害者ってことでいいのさ。

「入ってきていいぞ」

教師と生徒の目が一斉に扉に注がれる。これはなんていう公開差恥プレイなんだろうな？転校生よ、同情するよ。したところで何にもしてやれないが。

強く生きてくれ。

――ガラ

静かに開く扉。一気に教室が静まり返る。
あれだな、すごいものや綺麗なものを見ると思わず黙ってしまうなんて言うが、今の教室の状況はまさしくそれだろう。
誰一人として言葉を発するものがいないのだから。

「藤本百合です。みなさんよろしくお願いします」

ありきたりな挨拶なのだが破壊力は抜群のようだった。たった一言で男子生徒はおろか女生徒まで放心したような顔をしている。
長いまっすぐな黒髪。やわらかい目元に淡い微笑み。均整のとれたその表情での笑顔は見たものを引き込む力を持っているようでもあった。
今のクラスメイト達がいい例だろう。

「とりあえず席は水野の隣だ。わからないことがあれば教えてもらえ」

その瞬間に教室中から殺人的な視線が飛んできた気もしたが、おそらく気のせいだ。そういうことにしといてくれ。

「それじゃあ、ＨＲ終わり」

いつもの倍くらいのテンションで担任が教室を出て行ったその瞬間、ハイエナ共が動き出した。
もちろんここで言うハイエナとはクラスメイトのことだ。飢えすぎだ、若干数名は少し目がやばい気もする。

実はあの転校生はサキュバスの親戚なのかもしれない。

「水野よ、お前は行かないのか？」

「だからいきなり現れるなと言ってるだろうが、気色悪い」

「俺も照れるなと何度も言っているだろう？」

俺のいやみなど意に介しもしやがらない。こいつの神経がどうなっているのか一度見てみたいものだね。

「ものすごいぞ」

前言撤回、謹んで辞退させていただこう。俺にはパンドラの箱を開ける勇気はないからな。

「それで、お前は行かないのか？」

なぜ俺があのハイエナの中にいかねばならん。哀れな草食動物は一瞬にして食われてしまうだろうよ。

「どちらかと言えばお前は雑食だろうが、まぁいい。時間はいくらでもあるだろうからな」

その通りだ。よく悪くも隣の席。話す機会なぞいくでもある。何も無理して今話す必要などどこにもないのだ。

ただ、少しだけ何かが引っかかっている気がする。なんだろうな？

こう頭の片隅でなんかがあるんだよな～。

「要領をえんな」

「わからないんだから仕方ないだろう？」

わかっている事といえば、この何かにあの転校生が関係していることくらいだろう。彼女を見てからこうなったのだから。

「まぁいいさ、授業行こうぜ」

重要なことならそのうち思い出すさ。というか本当に今日は思い出せないことだらけな気がする。まさかこの年で認知症じゃあるまいな？勘弁してくれよ。

「それはそれとして」

そんな華麗にスルーしないで欲しいんだけどな。結構重要な問題だと思うのだが。

「あれはあのままでいいのか？」

七倉の視線の先には未だに百合に群がる人、人、人。お前ら、授業遅れてもしらんぞ。

「なぜに俺がその状態をどうにかしなきゃいけないんだよ？」

「お姫様を助けるのは昔からヒーローだと相場が決まっているだろう？」

いつから俺はヒーローになった？前提条件の時点で間違ってるじゃないかよ。

「お前がどうでもいいというならそれでもいいがな」

なんだその意味深な発言は？ニヤニヤするな！うっとおしい！！

横でよくわからん態度を取っている七倉はほっとくことにして廊下

に出る。今日の1限は移動教室なのだ。早く行かねば遅れてしまう。
転校生よかわいそうに、初っ端から遅刻とはな。やれやれ、今日は騒がしい一日になりそうだ。

第5話（後書き）

ふう、やっと書き終わった…
本当文章がまとまらない…
なので、もしおかしなところがあれば
さらっと流してください。
ダメ作者ですみません…

第6話

～第６話～

いつもと代わり映えのしない授業。黒板に書かれている文字を追い、それをノートに書き写す。飽きた……。
窓から入ってくる心地よい風に目を瞑り、時間をやりすごす。はずだったのだが、

「寝ちゃだめですよ？」

昨日までは誰もいなかった隣の席から聞こえてくる注意。ちらりとそちらに目を向けると少し非難を含んだ目とぶつかる。
勘弁してくれ。午前中だけでもう４回目だ。授業は俺の貴重な睡眠時間であり、それを妨げてほしくはないのだが、肝心の転校生はといえば。

「ちゃんとノートとってくださいね」

なぜか半日も経たないうちに、俺のお目付け役となってしまわれたようである。おかげでまともな睡眠がまったくとれない。
やれやれ、誰か席を替わってくれ。今なら喜んでこの特等席を譲ってやるよ。もっとも寝れる場所以外は嫌だがな。

昼休み。どんな生徒でも楽しみなこの時間、俺はといえば中庭の一角に陣取って昼飯を食べていた。
例の転校生のせいでまったく眠れなかったせいで頭が重い。午後の

授業はサボるのもいいかもしれない。
また隣からの冷たい視線に晒されながら授業を受ける自信はないし、何より今日は天気がいい。多少の暑さはあるが今いるこの場所は大きめの木のおかげで日陰になっていて昼寝にはちょうどいいだろう。しばし目を瞑ってみる。そよそよ吹くと風が眠気を煽っている。ああ、やっぱり午後の授業はさぼりだな～。

「隣いいですか？」

昼飯も食べ終わり、本格的に昼寝に入ろうと目を閉じたのだが、思わぬ声に一時中断を余儀なくされる。

「お邪魔でしたか？」

お邪魔ですと言ってみようかとも思ったが、そこはぐっと我慢。目の前に立っていたのは誰であろう、俺の睡眠を妨害した張本人ではないか。

「あの、聞いてますか？」

もちろん聞こえてはいるのだが、いかんせん今の今まで寝ようとしていたのだ。うまく頭が働かない。
というか何しに来たんだこいつは？

「別にいいけど……」
「そうですか♪」

言うが早いかあっという間に隣に座ってくる。早いなおい、まだ言葉の途中なんだが。

「いい場所ですね」

そりゃそうだ。俺が一年かけて見つけた場所だからな。入学してからまず取り掛かったのが、校内にお気に入りの場所を見つけること。やっぱりそういう場所を確保しとくのは重要だと思うんだよ。まさかそれを見つけたのが入学してからまる一年経ちかけた3月になるとは思わなかったけど……。

「そうなんですか」

そうなんだよ。

「……」

なぜ黙る？俺に何か用があったから来たのではないのか？午前の授業態度に対する説教だったらいらないぞ。始まった瞬間に即逃げる。

「なぁ、一体俺になんの用なんだ？」

「用がないと一緒にお昼を食べちゃいけないんですか？」

質問を質問で返すなよ。それからそういう台詞は彼氏にでも言ってやってくれ。誤解を招くぞ？

「彼氏なんていないですよ？」

もういい。今確信したが、この転校生は少し普通じゃないようだ。間違いないよな？

「質問を変える。何で俺と弁当を食べるんだ？」

予期せぬ質問だったのか、指をあごに当てて考え込む転校生。まさか理由もなしに来たのか？だとしたら頭のねじが２．３本飛んでると認定してやろう。

「強いて言うならなんとなくです♪」

ＯＫ，もうこの話はやめにしよう。この子に何を言っても暖簾に腕押し、まったくもって意味がないような気がする。
当人はといえば、いつの間にか広げた弁当を小さな口でぱくつき始めている。小さいお弁当だな。
これで午後の授業中もつのかね？

「あげませんよ？」

何でそうなる？

「獲物を狙うライオンみたいな目をしてました」

どんな目だそれは。ぜひとも見てみたいから鏡を貸してくれ。

「あいにく鏡は教室においてきてるんです」

そうかい。もういいから静かに弁当を食べててくれ。俺は寝ることにするから。先ほどと同じく目を閉じる。
吹く風も、周りのざわめきも、気温も同じ。唯一違うのは、隣で転校生が弁当を食べていることだった、

第６話（後書き）

ずいぶん間が空きましたが、６話更新です。
空けたわりには、たいして長くないな…

第7話

～第７話～

さて、現在の状況を整理しようじゃないかワトソン君。
俺は午後の授業をサボるつもりでここで寝ようとした。そしたら理由は知らんが転校生が登場して隣で弁当を食べ始めた。
俺はそれを横目で見ながらまた寝ることにした。目が覚めたら俺の膝に頭をのせて転校生が寝ていた。

Ｗｈｙ？

待て待て、何でこいつはここにいる？授業はどうした授業は？時計に目をやれば午後の授業の開始からすでに３０分がすぎている。
つまりはサボりだ。俺は最初からそのつもりだったが、何でこいつまでサボっている？
だめだ、この状況は俺の頭の容量では解析できそうにない。誰かメモリを増設してくれ。
冗談はここまでにして、よく思い出してみようじゃないか。一体どうしてこんな誰かに見られたら死亡フラグが一発で立ちそうなイベントが起こっているのか。
思い出せ俺！！やれば出来る！！

……、思い出した。

さて、それじゃ少し時間を遡ってみようじゃないか。

「いい天気ですね」

人が寝ているにもかかわらず、関係なく話をしはじめる。まさか昼休みまで俺の安眠を妨害する気なのかこいつは。

「でも少し暑いかもしれませんね～」

無視を決め込むことにする。俺は寝てるんだ、頼むから早く教室に戻ってくれ。

「無視しなくてもいいんじゃないですか？」

確定。どうやらこいつは俺の邪魔をしにきたようだ。何がしたいんだろうね？

「お話しません？」

「俺は寝たいんだが？」

「まぁいいじゃないですか♪」

何がいいんだ何が。あきらめて目を開けてみれば、ニコニコとした顔にぶつかる。

「やっとこっち見てくれましたね」

やられた。なんか無性悔しい気持ちをなんと隠し上体を起こす。

「授業中も寝てたのに何でそんなに寝たいんですか？」

いつもの俺からしてみれば、今日寝ていたのは１０分の１くらいだろうか？簡単に言えばまったく寝てないのと同義だな。

「それって私のせいですよね？」

小動物のような目で見つめてくる転校生。そんな目をしてるからクラスのハイエナが群がるんだ。少しは自重したほうがいいぞ？

「あれは違いますよ。転校生が珍しいだけです」

果てさて、これはカマトトぶってるだけなのか、それとも真面目に答えているのか、どっちが本当かで相当印象が変わるわけだが、残念ながら今の状況では判断するだけの材料が足りないな。

「それよりも私のせいなんですか？」

うまく話をそらしたと思ったんだが……。どうやらそううまくいかないようだ。ここは正直にいうのが吉なのか、大いに悩みどころではある。

「もしそうだったとしたら、これから起こすのをやめてくれるのか？」

我ながらうまい切り替えしだ。これなら相手の答え方しだいでいくらでも先の展開を誘導することが出来る。

「もちろん起こしますよ？」

「何でだ？」

「もちろん授業中に寝るのはいけないからですよ」

よし、クラス委員に席替えをするように嘆願しようじゃないか。この際一番前でもいい。全員が全員起こしてくるわけじゃないからな。

こいつが隣にいるよりもよっぽどましだ。

「今の話からすると私のせいなんですね？」

もういいや、これ以上はぐらかすのも疲れる。それに本当に早く寝たい。いい加減この時間を邪魔されるのはまっぴらごめんだ。

「他に考えれる要因はないな」

「そうですか……」

「話は終わりだろ？頼むから寝させてくれ」

これで話は終わるはずだったんだ。いや、少なくとも話は終わった。状況はさらに悪化することになるのだが。

「それじゃ、私も一緒に寝ることにします」

すまん、何だって？

「だから私も一緒にお昼寝するっていったんですよ。やっぱり新しい環境は疲れますから」

その気持ちはわかるが何だって一緒に？あなたは男に対する警戒心というものがないんですか？

「じゃあ、おやすみなさい」

これまたすばやい行動で俺の膝に頭を乗せる。それはさすがにまずいだろう！？

「ちょっと待て、よ？」

「すぅ……すぅ……」

早っ！？どんだけ寝つきがいいんだよ！！それよりもこの状況どうするよ？もう一度言うが流石にまずいって。
寝ているところ悪いが起きてもらうほかない。寝るならせめて他の寝方にしてくれ。

とりあえず肩をゆすってみる。起きない。
耳元で声をかけてみる。起きない。
ほっぺたをつついてみる。やわらかい。

って俺は何をしているんだ！？これじゃ、何だか恋人みたいな感じじゃないか！！

何とか起こそうと思考をめぐらせてみるが、頭はいい答えを導き出すどころか、急激に眠りモードへ移行し始める。

何だかどうでもよくなってきた。

どうせ次の授業はサボるつもりなのだから別にいい。何だか余計なおまけがついてきてしまっただけだ。
それにこいつも疲れてるんだろう。きっとそうだ。
とまぁ、勝手な解釈をつけた俺の脳をとめるものは何もない。数秒後には夢の世界にいざなわれていくのだった。

そして現在、絶賛後悔中だ。あ～、足がしびれてきた……
もちろんもう一度起こしてみたが、今度は反応すらしやしない。いわゆる熟睡モードに入っていらっしゃる。

何でこの状況で熟睡できるんだ？警戒心というものがこいつにはないのだろうか？

「やれやれ……」

空は無駄に晴れ渡っていた。誰にも見つからないことを祈ろう。

第7話（後書き）

7話書き終わった～
進まない…長い目で見てやってください。
感想なんぞあったら嬉しいです。

第8話

～第８話～

「う～ん、よく寝ました」
「初日から授業さぼっていいのかよ……」
「たまにはいいじゃないですか♪」

初日からさぼることが、たまにになるのかは甚だ疑問ではあるが。
余計なことを言うのはあえてやめておこう。
時刻は現在午後４時ちょっと前。当然、すべての授業はすでに終了していて今は放課後真っ只中だ。
遠くのほうで部活の喧騒が聞こえてくる。

「こんなに気持ちいと病みつきになりそうですね～」

不吉なことを言うのはやめて欲しいものだ。自分の隣で授業をさぼったこいつが寝ているのを見て身震いする。
毎度そんなことを続けてみろ。いつかはばれて大変なことになるのが目に見えている。

主に俺が！！

もちろんこれから授業にちゃんと出るという選択肢はなしだ。ある程度はさぼらないと俺のエネルギーは枯渇してしまうんだ。

「そんなに疲れてたのか？」

心なしか転校生の顔色がよくなってるような気がしなくもない。
「さっきも言っいいましたけど、新しい環境というのは無駄に疲れるもの何です」
たとえ自分が気づいていなくてもと、転校生は付け足す。
まぁ、わからなくもないけどな。確かに新学期の開始のときとかやたらと疲れてたような気がする。
勢いあまって、次の日に寝過ごしてさぼってしまったのは内緒だ。
「さて、教室に戻りましょうか」
どこまでも自由な転校生だ。このままだと本当にこの場所でこれからもさぼりそうな勢いだよ。別の場所探そうか……。
「早く来ないと置いていきますよ？」
「別に待ってくれと頼んだ覚えはないぞ」
「つれないこと言わないでくださいよ」
人に授業中に寝るなとか言っておきながら、自分は初日からさぼる。
まったくといっていいほどこいつの性格が読めない。
やれやれ。
なんとなくだがこれから先、こんな風にこの転校生に振り回されそうな気がするよ。勘弁してもらいたいものだ。

放課後の校内には生徒はほとんど残ってはいなかった。ほとんどの生徒は部活に行くか帰宅している時間だしそれも当然だろう。もっとも、今の状況は俺にとっては幸い以外のなにもでもない。こんな光景を誰かに見られた日には明日から学校にこれなくなっちまうからな。

「水野さん」

なんだ？

「私のことは百合でいいいですから」

は？

「ですからこれからは百合って呼んでくださいと言ってるんです」

臆面もなくそういう百合の言葉の意図を読み取ることは、今回もまたできなかった。というか話が唐突すぎるだろう。

「お隣の席同士なんですし、何よりほら、一緒に授業をサボった仲じゃないですか♪」

一緒にとか言うな。お前が勝手にサボったんだろう。俺は一緒にサボる気などなかった。

「既成事実って便利な言葉ですよね～」

殴っていいか？

「冗談ですよ♪まぁ、いいじゃないですか。細かいことは気にせず

に♪」

ものすごく気にしなければいけないことのような気がするのは俺だけだろうか？女子を名前で呼ぶってのは、結構すごいことだと思うんだが。
特にこの年頃の奴は過敏に反応するからな。相手がこいつならなおさらだ。

「それに……」
「何か言ったか？」
「いえ、何でもありません」

笑顔でそう答えるが、確かに一瞬何か強い気配を感じた。それにという言葉の後に言った何かにあわせるように。
それは目の前の女子から感じられるものとはまったく不釣合いのもの。いうなれば殺気のような……

なんてな。少し警戒しすぎてそう感じただけだろう。何で転校生に殺気を向けられなければならんのだ。七倉のやろうじゃあるまいし。
そんなのは、明日から百合と呼んだときに受けるクラスの男子からのものだけで十分だ。

「どうかしましたか？」
「いや、変わった奴だと思っていただけだ」
「それ、褒めてます？」
「微妙なラインだな」

なんにしても、悪い気はしないさ。友人が増えるのはいいことだし、転校早々に人気者と仲良くなれたのだ。
授業中に起こされるのは勘弁したいものだけどさ。

明日から大変そうだな。

第8話（後書き）

うにゃ～進まない～なぜだ～
はい、８話アップです。本当進んでませんが、
何度も言うのですが、長い目で見てください。

第9話

～第9話～

静かな空間に鳴り響く旋律。白と黒の織り成すプレリュード。
一日で一番落ち着く時間。心地よい空間。

このだった広い学校にはそれに見合うだけの校舎の数があり、それに見合うだけの教室がある。
総数は数えるのがためらわれるので知らないが、それだけの数があるのだから、使われていない部屋というのも結構あったりする。
そんな使われていない教室のひとつが、ここ第3音楽室。放課後の俺のたまり場だ。

「何かいい言い訳はないものか……」

鍵盤をはじく指の動きを止め、ため息をひとつ。もちろんその理由は転校生と午後の授業を
さぼってしまったことであり、明日の言い訳に悩んでいるのだ。

もちろん二人一緒にさぼったのは不可抗力であり、誰かに言いふらすなんてことを俺も彼女もしやしないが、俺達は隣の席同士なわけで、
転校初日の人間が隣の席の人間と一緒にいなければ、変な誤解をされてもしょうがない。

「というか七倉あたりならすでに知ってそうだよな……」

無駄な情報を持つあいつには、今まで何度脅迫まがいの行いをされたことか……。

そんな転校生はといえば、すでに下校してしまった。一緒に帰ろうと誘われたが、これ以上噂の原因をつくりたくないでの即刻辞退させてもらうことにした。

どうにもあいつは苦手だ。

夕暮れの光だけでは少し薄暗い部屋。隅のほうは目をこらさなければすでに見づらくなってきている。

――〜♪〜♪

頃と白のコントラスト。その上を自分の指が躍る、走る。それに合わせて教室に音が響く。

ピアノを弾いている間は何もかも忘れられる。嫌なことや、辛いこと、悩みなんかも考えなくて済む。

だからこの時間は何よりも好きだった。もちろん、ピアノを弾くこと自体も好きだ。

ピアノを始めたのは確か小学生あたりだっただろうか？

なんでも母親によれば、父親に少し教えてもらったことがあるらしいがまったく覚えてはいない。

それでも独学でここまで弾けるようになったのは、もしかしたらそのお蔭なのかもしれないと思うこともたまにある。

真相がどうであれ、少なくともこのスキルが自分にとって有益なの

は事実なのだからまぁ、よしとしよう。

思考を閉じる。

そして演奏という名の海へ落ちて行った。

教室の中が完全に暗闇に落ちる頃、ようやく思索の中から意識が戻ってくる。時計を確認してみれば、すでに下校時刻を大幅にすぎている。

道理でこんなに暗いわけだ。

一度演奏に集中し始めると時間を忘れてしまうのはいつものこと。それでも今日はほんとに集中していたようで、いつもよりもずいぶんと遅くなってしまった。

「早いとこ帰らないとなぁ……」

水野家において夕食の支度は自分の仕事だ。毎日朝から仕事に行っている母親に朝食はともかく夕食まで作ってもらっているのは気がひけた。

それでなくても小さい頃から苦労をかけているのだからと、中学の途中から自ら志願したのだ。

まぁ、最初のころは燦々たるものではあったが、今では腕もプロ級だ。……、今のは言いすぎだけど、それでもうまくなったのは事実なのだ。

俺、頑張った。

よくわからない感慨にふけっていたせいか、扉の外に近付いていた人の気配にまったく気づいていなかった。
その時との俺はと言えば今まさに扉を開けようとしていたわけで、そしてどうやら外にいた人も同じタイミングで扉を開けようとしていた。

異常に勢いよく開く扉。

「「あれ？」」

重なる声。

「香介君！？」

妙に聞きなれた声。

「何でこんなところに香介君がいるの！？」

そこには一人の女の子が立っていた。

第9話（後書き）

2日連続で更新。快挙だ…
最初はそうでしたが、今は無理です…
情けない作者ですみません＞＜

第１０話

～第１０話～

油断大敵とはよく言ったもので、今まで誰とも鉢合わせになったことがないからと言って気を抜きすぎていたのかもしれない。
まぁ、ばれたから言って何がどうなるわけでもないのだが、それでも今まで隠していたのだからあまり誰かに知られたくはなかったのも本音だ。

「香介君はここでいったい何をしてたのかな～？」

「スクワット？」

「う～ん、ボケとしては１０点かな？しかも何で疑問形？」

どうやら俺にお笑いの才能はないらしい。じゃなくて、なぜに俺は同級生から尋問まがいなことをされねばならんのだ？

「悪いことしてたんじゃないなら言えばいいんじゃないのかな？」

「世の中には黙秘という便利な言葉があるんだ」

「うん、それ却下♪」

一刀両断ですか。そうですか。

たった今、音楽室の扉もとい地獄への扉を開けてあらわれたこの人物は朝倉奈菜。隣のクラスの友人だ。
言っとくがそれ以上でも以下でもないからな？
長めの髪をツインテールにして満面の笑みを浮かべながらこっちを見る奈菜は、確かに非常に魅力的ではあるのだが。

「そんなにいいにくいことなのかな？」

別にそういうわけではない。ここで何をしていたかといえばただピアノを弾いていただけなのだ。別段隠すことでもない。
ただ言いたくない。ここまで来ると子供の意地みたいな気がしてこなくもない。

「香介く～ん？」

下から覗き込むようにこちらを見る奈菜。そんな顔で見るのはやめてくれ。

「そんなに言いたくないの？」

「そういうわけでもないけど、なんとなくな」

頼むからこれで引いてくれ。一度言いたくないと決めたんだ、最後まで貫こうじゃないか。貫いたところで別になんのメリットもないんだけど……

「じゃあ、交換条件♪」

「条件？」

なんだか悪魔のささやきが聞こえたのは気のせいか？

「そ♪今度一曲聞かせて♪」

この野郎。気づいてて遊んでたな。

見れば、奈々の表情はこれ以上にないほどにこやかである。どこからどこまでが演技なのかは知らないが、少なくとも俺が奈々の掌の上で踊っていたことに間違いはない。

やれやれ。なんてやつなんだよ……。

「でも、すごく綺麗な音だったな～。久しぶりに感動したもん」

「そりゃどうも」

実にそっけない返事だと自分でも思う。自分がすごく情けない気がするのだが……。

「別に誰にも言わないんだけどな」

苦笑交じりの声でそう言われると、なんだか申し訳なくもなってくる。だがしかし、秘密というものは一人に教えてしまうと、後は際限なく広がってしまうもの。

「大丈夫、絶対言わないよ♪」

仕方があるまい。しっかりと気をつけていなかった自分がいけないのだ。今は奈菜の言葉を信じるしかないさ。

別に奈菜の口が軽いわけでも信じられないわけでもない。ただなん

となく、人を信じるというのが苦手なだけ……

「そういえば今日は香介君はお買いものに行くのかな？」

「そうだな……」

そういえば今日の夕食の献立はまだ未定。というか冷蔵庫の中もすっからかんだったような気がする。

母さんは使い方が荒いんだよな。

料理はうまいのだが、食材の使い方が半端じゃない母親のせいで、俺の買い物に行く機会はウナギ登りだ。

「行くか」

「そっか、じゃあ早く行かないとね♪」

言うが早いか奈菜は俺の腕をとって、音楽室を飛び出す。

「ちょ、おい！」

「早く早く～♪」

どこにそんな力があるのか、俺の腕を引っ張る奈菜。どことなく楽しそうに見えるその顔を見ると、次に言おうとしていた言葉はあっという間にどこかに霧散してしまった。

ま、いつものことさ。

奈菜と知り合ったのはいつも俺が利用しているスーパーでだった。詳しくは知らないが、奈菜は両親と離れて一人暮らしをしているらしく。当然も家事もこなすのだから食事も作る。その買出しのさなかに知り合ったというわけだ。
それ以降、せっかくなので二人一緒に買い物をすることがしばしばあるのだ。なぜか、そのことを知った瑠璃は面白くなさそうだったが、まぁ気にすることではないな。

「じゃあ、また明日ね♪」

「ああ……」

買い物を終えて、いつも別れる場所に差し掛かる頃にはすでにあたりは暗くなり始めていた。昼間はあんなに暑かったというのに、今の時刻はまだなんとなく肌寒い。

「そうそう、約束忘れないでね？」

「へ？約束？」

約束……。俺は奈菜といったいどんな悪魔の契約をしてしまったのだろうか。そんな俺の様子を見てどう感じたのか、奈菜はそのほほを膨らませる。

「さっき音楽室でこんど一曲聞かせてね～って、言ったでしょう？」

「世間一般にはあれは約束じゃなくて脅迫っていうんだぞ？」

「うん、楽しみだな～♪」

聞いちゃいない。何がそんなに楽しいのか持っている買い物袋を大きく前後に揺さぶる。

その様子はまずで子供のようで、思わず了承してしまうそうになる。

それもいいのかもしれない。

「……今度気が向いたときにな」

「楽しみにしてるからね～♪」

「ああ」

ますます深くなる奈菜の笑顔。あたりは薄暗く視界はだんだんと悪くなってきてるのに、不思議と奈菜の表情は細かく見てとれた。

それが実際に見えていたのかどうかはわからないが、それだけ奈菜の笑顔は輝いて見えた。

「それじゃ、また明日ね♪」

言うが早いか跳ねるように帰り道に消えていく。その後ろ姿が完全に見えるのを待ってから、俺も家路につくのだった。

第１０話（後書き）

１０話更新です！！また新たなキャラが追加と。
ハーレム化してきてますね…
ま、いっかな！アハハ…
読んでくださってるみなさん、ありがとうございます！

第１１話

～第１１話～

あくる日の教室は異常な殺気に包まれていた。黒板の前ではいつものように教師が授業を淡々とこなしている。しかし、大半の生徒（おもに男子なのだが……）の視線が俺に突き刺さっている。視線で人が殺せるのなら、俺はすでに何回死んでいるだろう？
隣の席では百合が熱心に黒板の文字をノートへ書き写している。その瞬間、ちらりとその様子を見ただけのなのに殺気が５割増しになったのは気のせいじゃないはずだ。
その視線から逃れるために窓の外に目をやれば、今日も雲ひとつない青空が広がっていた。

今朝の目覚めはそんなに悪いほうではなかった。いつも通りに朝食を食べ、ニュースの占いコーナーを見てみれば、順位は６位。これもとくに悪くなく、ほんとうにいつも通りの朝の光景だったのだ。今日も遅刻をすることもなく教室にたどりついた俺を見る悪友の顔が、大変な間抜け面だったのはいつもと違った……、いや、これもいつもと一緒だ。

「おいおい～、香介が２日連続で遅刻しないなんて槍でも降ってくるんじゃないのか？」

そう言いながら俺の肩をばしばしと叩くこいつは九条歩。七倉同様、俺の悪友だ。男にしては少し長めの茶色の髪。学校指定のブレザー

を着ずに薄手のパーカーを着ている様を見ると、いかにも不真面目そうに見える。実際不真面目なのだが、根はいいやつだ。

「本当に何かあったのか？なんか悪いもんでも拾って食べたとか」

「俺は犬か何かか……」

昨日と言い、今日といい、とことん俺は遅刻常習犯だと思われているらしい。ここまえくると本気で遅刻を注意しようと思えてくる。思っても実行できるかはまた話が別なわけだが……。

「ま、どうでもいいけどな」

自分で話をふったくせになんてやつだ。

「そういや香介、お前昨日の午後どこ行ってたんだ？エスケープは別に珍しくないけど、一言も無しってのは珍しいんじゃないのか？」

歩は俺の隣の席に座ると、どこから取り出したのかコンビニで買ってきたらしいパンを口に放り込む。本人は自覚がないらしいが今の質問は俺を相当同様させていた。昨日の放課後といえば忘れようもない、百合が人を枕に寝こけていたころであり、さぼりの真相。そんなことをこの場で言ってみろ。教室中、いや、昼までには校内の大半の男子を的に回すのは自明の理だ。それだけ百合の人気は転向わずか1日でうなぎ上りなのだ。

「別に毎回毎回お前に報告しなきゃいけないことでもないだろう？」

「そりゃそうなんだけどな。お前がいなくて俺がいるもんだから、先公がやたら俺にどこにいったのか聞いてくるんだよ。」

知らないつってるのによと、言いながら早くも2つ目のパンの袋を開封している。どうやら朝食を食べてきていないらしい。
まぁ、教師が歩に聞くのはあながち間違ってはいない。授業をさぼる時はたいてい歩と一緒のことが多い。たまに七倉もいるが、基本的にあいつは授業にはしっかり出ている。

「そりゃ災難だったな」

「まったくだぜ。本当に俺に何か恨みでもあるのかってんだよ」

「まぁまぁ、ガムやるから機嫌なおせよ」

「お、まじか！」

俺がポケットからガムを取り出すや否や、あっという間にそれを奪い取る。パンとガムの相性が非常に気になるところだが、少なくともこの話題は回避できたようなのでよしとする。あくまで歩だけは……

「おはようございます水野さん」

声の方向に目を向けてみると、そこには今までの話題の原因である百合が立っていた。もっとも今歩が座っているのは百合の席であるのだから、ここにいることになんの不思議もないのだが、心なしかクラスの男子の視線がこっちに集まっているのは気にしたら負けなんだろう。

「ああ、おは……「おはよう！！百合ちゃん！！」

あいさつの途中に歩のやつが割って入ってきやがる。

「いや～、今日もかわいいね～♪どう、放課後俺と一緒にデートでも？」

「どうしたんです水野さん？眉間にしわがよってますよ？」

そして百合はなんとも華麗にスルーしてみせた。歩が教室の隅でいじけているのは放っておこう。

「さてな、眉間にしわが寄ってるのはもとからなんだ」

「いやいや、昨日の寝顔を見た限りそんなことないと思いますが？」

こいつあのとき起きてやがったな……

「人の寝顔を盗み見るなんていい趣味してんじゃねぇかよ……」

「水野さんも見たんですからおあいこということにしておいてください」

別に寝顔を見られたくらいどうということはないが、なんとなく釈然としないのはなぜだろう？

このとき俺は気づいていなかった。今自分たちがどれだけ爆弾発言をしているのかを。

「おい、香介……」

「どうした歩？」

いつの間に復活したのかはしらないが、俺の背後からいきなり現れる歩。その顔がどことなくひきつっているのはなぜだろう？

「お前なんで百合ちゃんの寝顔なんか見てるんだ？」

このとき俺はようやく自分が言ってしまったことに対する重大さに気づいた。今の発言だけ聞けば、あらぬ誤解をあたえてしまってもまったくおかしくはない。むしろそう感じるのが普通の反応だろう。だが時すでに遅し。教室にいるすべての視線がこちらに集まっている。女子は好奇の目で。男子は異常に殺気だった目で。

「落ち着け歩。お前の考えていることはすべて誤解だ」

「へぇ、どんな誤解だっていうのかひとつひとつじっくり聞きたいもんだな」

あ、歩の目まで殺気に満ち溢れてる。

半分は自業自得とはいえこの状況はまずい。助けを求めて周りを見回す。

「ふむ、実に興味深い話だな」

こら七倉。なんで手帳を広げてメモをとってるんだ！こんな情報をどうする気だ！！明らかにこの状況を楽しんでるいるその顔に、こぶしをくれてやりたいが今はそれどころではない。

「おい百合！！なんとかしろ！！」

――ドカン

どこかでそんな音がした気がした。必死だった俺はことの発端である百合に助けを求めるはずだったのだが、それは大きな自爆。

「水野よ、いつの間に名前で呼び合うほどの仲になったんだ？」

七倉の言葉はさながら死の宣告のようなものだった。いつの間にかできていた俺を囲う包囲網。

その包囲網はが徐々に狭まってくる。なんて浅はかなんだ。いくらせっぱつまっていたとはいえ、自分から自爆してしまうとは。しかし攻撃はそこで終らない。とどめとばかりに元凶が最後の爆撃をしてくれた。

「一緒に授業をサボった仲ですから♪」

静まり返る教室。この静けさを言葉で表現するならまさに『シーン』という擬音語がいいのではないだろうか？今の静けさなら教室内でのものおとならば、どんな小さな音でも聞き取れる気がする。

「香介……、少しばかり語り合わないか？」

語り合うのが言葉であるなら応じてやらないでもないが、言外にあきらかにそれ以外のものがにじみ出ている。たとえば拳とか……

じりじりと狭まる俺への包囲網。そこから少しはずれたところで喜々として何かのメモをとり続ける七倉。包囲網の内側にいながらも、その笑顔を崩すことのない百合。そしておもいっきり顔をひきつらせているであろう俺。

短い人生だったな。

辞世の句でも読もうと思ったその瞬間、天は我に味方した。圧倒的な威圧感を出しながらも静まり返っていた教室に教室前方の扉が開く音がやたらに大きく響く。

「何をやってるんだお前ら？」

最高のタイミングでの担任の登場である。目を血走らせた包囲網の面々も、さすがに教師の前で何かをする気はないらしく、三々五々に各々の席に散っていく。だが、散って行きながらも俺を見る視線がこう言っていた。

これで終わりだと思うなよ。

俺、何か悪いことしたかな？本気で神社か教会に駆け込んでみようかと思いたくなる。それで今見舞われている不幸を回避できるなら５００円くらいはさい銭箱や寄付金として払ってもいい。ついでに授業もさぼれて一石二鳥だ。

「水野さん？どうしたんです、遠いところを眺めて？戻ってきてくださ～い」

誰のせいでこうなったと思っている。それこそ文句を並べたてたいところではあったが、そんなことをしれば最後、周りの男子にタコ殴りにされるのは目に見えている。やれやれ、朝から不幸なことこの上ない。いつから俺はこんな不幸になったのだろうか。そんなことを思いながら、とりあえず自分の席に落ち着くのだった。

とまぁ、以上のようなことがあり、授業中にもかかわらず殺気を一心に浴びているのである。もう一度、今度は誰にも悟られないよう

に百合に視線を向けてみると、なぜか今度は百合本人と視線がかちあう。

にこっ

そして図ったかのような笑顔。くそ、１Ｒ開始わずか１０秒でＫＯされた気分だ。あんな顔されてみろ、後で何も言えそうにないじゃないか。すでに授業に戻っている百合に軽くため息を吐きながら、向けられる殺気にあきれつつ、この理不尽な一日をどう過ごすのかを真剣に考えるのだった。もちろん授業を聞いていないのはいつものことだ。

第１１話（後書き）

最近読んでくれている方が増えているようで、
とても嬉しいです！！
みなさん、ありがとうございます♪

第12話

～第12話～

殺気に彩られた午前の授業もようやく終了し、一日の一番の楽しみといえるかもしれない昼休みの到来。俺はと言えば、もちろん4限目の終了とともに教室から逃げていた。この第3音楽室であれば誰も追ってはこないだろう。ようやくひと時の平穏が訪れた気がした。あのままあそこにいてみろ、それこそ首に肉をぶら下げてサバンナの空腹のライオンの群れに突っ込むようなものだ。命がいくつあっても足りやしない。

「憂鬱なことこの上ないな……」

なんだって俺がこんな目に逢わねばならんのか。今日何度目かもわからないため息が、音楽室の中でやたらと大きく聞こえた気がした。

「ふむ、早く食べすぎた」

さして腹が減っていたわけでもないのだが、今日は弁当を食べるスピードがやたらと早かったようだ。いつものあの木陰なら昼寝にしゃれこんでもいいのだが、なんとなく今日は場所が違うからか、そんな気はまったくしない。もちろん教室なんかには戻りたくもない。その後でどういう結果が待っているかは想像に難くないからな。そうはいっても暇なものは暇だ。何かないかと教室内を見渡してみる。もっとも俺以外の人間が最後に入ったのがいつかもわからない

この部屋に何か暇をつぶせるものを期待するほうが無駄な相談であり、いつものごとくピアノに目がいくことになる。

一曲弾くか？

あまりの暇さにそう思ってもみるが、あまり気は進まない。これが放課後なら間違いなく鍵盤のふたを開けているところだが、忘れてはいけない。今は昼休みなのだ。いかにこの第3音楽室に人が来ないとはいえ、校内に学生があふれているこの時間に弾くのはいかがなものか？物好きなやつが現れて、俺を目撃する可能性がゼロであるとはいいきれない。

別にばれたからどうってわけでもないけどさ……

昨日思ったことと同じことがまた脳内でリフレインする。それでもばれるのはできるなら御免こうむりたい。矛盾している感情。

「む～、早く弾いてほしいんだけどな～」

「だけどな～」

「大丈夫だよ！廊下には誰もいなかったから」

「そう言われてもな……」

……待て、俺は誰と会話している。できるだけさりげなく、それでいて相手にばれないように視線を声の方向へ飛ばす。

「どこから湧いて出た……」

「それ、少しひどいと思うんだけど？」

湧いて出た誰か、もとい声の主は奈菜だった。いつの間に入ってきたのやら、ちゃっかり弁当箱を広げてすでに鑑賞モードに入っている。というかなぜ気付かなかった俺？

「ほら、早く早く！時間は有限なんだよ？」

「なんで弾くことが決定事項になっているのか、そこから聞こうじゃないか」

「ここが音楽室で、そこにピアノと香介君がいるからだよ♪」

ウインナーを食べながら奈菜はニコニコとそう言い切る。なんだその理論は。

「それに昨日約束したじゃない？今度弾いてくれるって」

「だから今度だろ？」

「私の今度はこの時この瞬間なんだよ」

そんなもの知るか、と一喝したいところではあったが、すんでのところで思いとどまる。奈菜に限ってそんなことはしないと思うが、万一脅迫とかされたくないし。というかうそつき呼ばわりされるのも嫌だし。

「どうかした？」

「いや、どうしても今じゃなきゃ嫌か？」

「もちろんだよ♪」

やれやれ、どうやら覚悟を決めるしかないようだ。何度も何度も繰り返すが、別に誰かに聞かれて困ることなど何もない。それにはじめて聞かせる相手が奈菜なら、別に悪いことはない。

ピアノの蓋を開け、椅子に座る。音を確かめるために2つ3つ、鍵盤をはじく。

「一曲だけだからな」

鍵盤の上を指が躍った。

音が止む。ピアノの音が止まると、音楽室の中に再び静けさが戻る。弾き終わった後の達成感。このなんとも言えない感覚は好きだった。俺がピアノを弾く理由のひとつはこれだと言えるくらいに。

ぱちぱちぱち

奈菜の少し遠慮気味な拍手が響く。

「約束通り一曲だからな」

「……」

「奈菜？」

奈菜は拍手をしたまま動かない。どこか放心したような、意識がど

こかに飛んでしまっているようなそんな感じだ。ためしに目の前で手を振ってみるが反応はない。

「お～い、生きてるか？」

むにゅ

いつまでたっても戻ってこないので、ほほをつねってみることにする。自分のと違う、女の子特有のやわらかさをもった頬はよく伸びた。

「いひゃい！いひゃいよ！！」

「お、やっとしゃべれるようになったか？」

「ひゃなしへよ！」

「ん？なんて言ったんだ？」

「ひゃなしへ！！」

これ以上やるとマジで怒りだしそうだったのでとりあえず離す。なんとなくあの柔らかさから離れると、少し名残惜しいような気がした。

そんな俺とは対照的に、奈菜はといえば引っ張られて少し赤くなった頬をさすりながらむくれていた。

「もう！もとに戻らなくなったらどうするのよ！」

「それはそれでいいんじゃないか？」

「よくない！！」

珍しく声を荒げる奈菜に、少しやりすぎたかと感じてみたが、それは態度には出さないようにする。俺はどこかに意識を飛ばしていた奈菜の意識を連れ戻す手伝いをしただけだ。何もやましいことはしていない、はずである。

「せっかく人が感動の余韻に浸ってのに、台無しだよ！！」

どうやら感動していてくれたらしい。趣味でやっているものにそこまで評価を頂けるとは想ってもみなかったので少し、いや、だいぶ驚いた。それに素直にうれしくもあった。今なら頬を引っ張ったことを謝ってもいいかもしれない。

「しれないじゃなくて謝るんでしょう！？」

「なんだよ奈菜。人の考えを読むもんじゃないぞ？」

「言葉に出してたくせに～」

そう言ってまたむくれる。今度は少し涙目になっての上目遣いのダブルコンボだ。やめてくれ、そのコンボは核兵器並に危険だ。健全な一男子としては刺激が強すぎる。

「もういいよ。心の広い奈菜さんは失礼な香介君の暴挙も許してあげることにします」

それはどうも。しかし許してくれるといいながら、その眼がどこか何かを企んでいるようにみえるのは気にせいなんだろうか？

「それはそうと物は相談なんだけど」

やっぱり来た。

「一つがお願いがあるの」

果てしなく不安しか感じないのだが、この場からのエスケープは許されるのだろうか？許されるのならぜひとも実行したい。そしてそのまま3日くらい学校を休みたい。

「私が軽音部だってことは知ってるよね？」

「耳にタコができるくらいに聞かされたからな」

買いものに一緒に行ったとの帰りなどの話題に上るのはたいていその日に学校であったことなどだ。その会話の中で、奈菜が部活の事を話すのはとても多い。というか8割はそうじゃなかろうか？おぼろげな記憶をたどってみる。実のところ、最初のころこそしっかり聞いていていたのだが、最近では聞き流すことが多くなっていたりする。だってしょうがないだろう？毎回似たような話ばかりじゃ聞きあきるってものだ。

「確か楽器全般ができるとか自慢してたよな？」

なんでも奈菜は好きが講じて一般的な楽器ならほとんど扱えるらしい。ギターやベース、ドラムにキーボードとその他にもいろいろあった気がするがあんまり覚えていない。

「別に自慢はしてないけど…。まぁ、それはおいといて。実はね私

がバンドを組んでた人がね、この前部活やめちゃったんだ……」

これもあいまいな記憶だが、確か奈菜は今言った奴と二人でバンドを組んでいたらしい。もっとも二人ではバンドにはならない。ゆえにライブなどのときはいろいろと助っ人を頼んでいたらしい。役割としては基本的に奈菜がヴォーカル、もう一人の子がベースだったそうだ。場言いに応じて、奈菜がギターを兼任したりもしていたらしい。そんな状況ではあったが、それを話すときの奈菜はそれはそれは楽しそうだった。

「してその理由は？」

「なんか飽きちゃったんだって。他にもやりたいことができたとかなんとかで」

そう言ってうつむく奈菜。なんでもやめてしまった子にはちょうど彼氏ができたらしい。それで彼氏との時間を優先したいという理由が主だったものらしいが、今はすでに別れてしまって毎日友達と遊んでいるらしい。別に誰が何を仕様が、俺がとやかく言う権利はない。だけどそれは少しどうかと思った。少なくとも俺が奈菜なら１発と言わず１０発くらい殴ってやったところだろう。

「でもそれはもういいの。本人がやりたくないのに押し付けるわけにもいかないから」

「そりゃそうかもしれないが…」

「だからね、香介君が私と組んでくれないかな？」

なぜそうなる。

確かに奈菜の境遇には同情を禁じ得ないが、そこで俺が代わりを務めるというのは話が飛躍しすぎだろう。

「香介君とならきっとやれると思うんだ！！」

頼むから思わないでくれ。そしてそんなに期待を込めた目で俺を見ないでくれ。いきなりの無理難題に俺はと言えば、なぜか昨日あたりから多くなっているため息を吐き、これまた昨日から多くなった気がするが、視線を外に飛ばすのだった。

ああ、午後もいい天気になりそうだ。

第１２話（後書き）

最近毎日更新してますね。
いつまで続くことやら…
できる限りがんばりたいと思います！！

第１３話

～第１３話～

「私と組んでくれないかな？」

期待を込めた目。その目には困惑しきりの俺の顔がうつっている。

「香介君とならきっとやれると思うんだ！！」

「いや、あのな？」

「無理なお願いなのは十分承知だし、香介君があんまりピアノが弾けることを知られたくないのもわかってる。その上でお願いしてるの！！」

一瞬前の期待を込めた目から、今は必至な目に変わっている。それはいつもの奈菜からは考えられないくらい必死なもので、思わず首を縦に振ってしまいそうになる。

「もう一人頼んでる子もいるんだけど、パートを考えた場合、どうしても香介君には参加してほしい！！」

「えっと、だからな？」

「お願いします！！」

そう言って頭を下げる奈菜。まるで娘の結婚を許してほしいと言われている父親の気分だ。何にしてもあまり気持ちのいいものではな

い。もちろん奈菜の気持ちはわかる。仮に今頼んでいる誰かがＯＫしたとしても、奈菜を含めて人数はまだ二人。今まで通り誰かにヘルプを頼むという手はもちろんあるだろうが、奈菜としてはやっぱりしっかりとしたグループを組みたいのだろう。気持ちはわかる、わかるがそれで俺が色よい返事を出すかどうかは話が別だ。

「俺は……」

「どうしてそんなに人に知られるのを嫌がるの？せっかくすごい才能なのに隠しとくなんてもったいないと思うよ？」

別に隠してるわけじゃない。本当になんとなくなんだ。だけどそのなんとなくで今まで黙っていたのも事実。だから今更っていうのも気持のどこかにはあるのかもしれない。

「私は香介君の演奏を聞いて素直にすごいって思った。あの音は生半可な練習で出る音じゃない、長い間真剣に練習しないと出ない音。だからこそもったいないって思うの」

奈菜の言葉に軽く驚く。さっきまでとは質の違う驚き。まさか自分の演奏に対してそこまで高い評価をもらえるとは思わなかった。確かに練習はした、ときには手の指がつることもあった。止めてやろうと思うことも多々あった。

「そう思うから香介君の演奏をたくさんの人に聞いてもらいたい。もちろんこうは言ってるけど私に下心があるのも確か。だけど今言ったことは嘘じゃないよ？」

確かにいい機会なのかもしれない。不特定多数に聞かれるのはあまり好ましくないが、仲のいい奴らにくらいならいいかもしれない。

それに、このままぜっかくの高校生活を終わってしまうのも味気ない。どうせなら何か楽しい思いでの一つや二つは欲しいくらいだ。

「少し…、考えさせてくれるか？」

そうは思うが、やはりどこかに戸惑いも残っている。だから今すぐ結論は出せない。俺のはっきりしない返答に奈菜はと言えば、

「もちろんだよ！正直、絶対断られると思ってたからむしろ全然ＯＫ」

その割にはさっきまでのお願いは脅迫まがいだった気がするのだが、それほど奈菜も焦っているということなのだろう。というか本気で脅迫されてたわけではないということにしておきたい、主に俺の心の安息のために。

「それじゃ、よく考えといてね。返事はいつでもいいけど、なるべくなら早いと嬉しいな」

「善処するよ」

「お願いします♪さて、そろそろ昼休みも終わりだから私は戻ることにするよ」

そう言われて時計に目をやれば、すでに昼休みが終わるまで残り１０分を切っていた。どうやら当初の目的である弁当後の日前御潰すということはできたようだが、おかげでそれ以上のものがリターンされた気分だ。音楽室を出ていく奈菜の後姿は、なぜかとてもまぶしい気がした。

「やれやれだな……」

昨日の今日で気が引ける気もしたが、教室に行く気にはとてもなれなかった。本日もエスケープなり。

帰りのＨＲが終わるのを見計らって教室に戻る。教室にはすでに生徒がまばらになっている。そしてもっとも俺が警戒していた人物を探す。教室前方、いない。教室中央、いない。俺の席の隣、やはりいない。

「帰ったみたいだな」

「お姫様はたいそうご立腹だったがな。つい１０分くらい前に帰ったぞ」

「誰がお姫様なんだ誰が」

「藤本嬢のことにきまっているだろう。彼女が転校してきてからというもの、お前の興味は彼女のみのようだからな」

「いつものことながらお前の言うことは理解不能だ」

いつどこから現れたのかは知らないが、七倉の言うことは話半分、いや2割程度で聞いておくにこしたことはない。これはこいつと付き合っていく上での常識と言ってもいい。でないと精神的にもたないものがる。

「そんなことはどうでもいいか」

自分で振っておいて自分で一蹴するなよ。

「時に水野よ。これから何か予定はあるか？」

「特にはないな。強いて言うならタイムセールが気になるくらいだが…」

「よし、では行くぞ。校門で九条が待っているからな。早く行ってやらんと誰かれ構わずナンパするだろうからな。それはそれで面白いのだが、今日の目的はそれではないのでな」

その目的とやらが不安でしょうがないのだが、歩もいるのであればおそらくはゲーセンあたりで遊ぶのが関の山だろう。それに今はそれもいい。考えるのにも疲れたところだし、こいつらと遊んで気分転換するのもいいだろう。そう思い、ふと廊下に目を向ける。

「どうした？何か珍しいものでもあったのか？」

「いや、たぶん気のせいだ」

気のせいのはずだ。七倉によれば俺が教室に戻ってくる１０分ほど前にかえったはずなのだから。理由はない。理由はないが、なぜかそう思わなければならない気がした。

教室の扉の影から百合がこっちを覗いていたような気がしたなんて。

第１３話（後書き）

なんか、文章がへんな気がする…
きっと雨のせいだ！そうに違いない！
……ごめんなさい、私のせいです。

第１４話

～第１４話～

「後、１ポイントで俺の勝ちだな、九条よ」
「ま、まだだぜ！ここから俺の本領が！」
“カーン”
「俺の勝ちのようだな」
「ばかな…」
その場に崩れ落ちる歩。その隣で勝ち誇っている七倉。
『何がしたいんだこいつらは…』
エアホッケーでなんであんなに盛り上がれるんだ？
飲んでいたコーヒーの缶をゴミ箱に投げたら、うまい具合にナイスシュート。
人生もこのくらいうまくいけばいいんだけどな…
なんてくだらないことを思ってみた。

「んで、何かあったのか？」
「は？」
「だから、何かあったのかって聞いてるんだよ」
歩むの唐突な問いにおもわずマヌケな声が出る。
いきなり何を言ってるんだこいつは？
「なんのことだ？」
「そのしけた顔の理由を聞いてるんだよ」
そんな顔してたのか？
おもむろに顔を触ってみる。特に意味はないが…
「お前はそういうやつだよ…」

「九条よ、それは言うまでもないだろう」
なんかすごい言われようだな…
特に七倉。なんかすごいバカにしたような目でこっちを見ている。
……、殴っていいですか？
「お前らな…」
「どうやら、ちゃんと説明してやらねばならないようだな」
馬鹿にしたような目から一転、なんだか、かわいそうな人を見る目で見てくる七倉。
余計悪くなってないか…
「いいか水野、つまりだ。今日のお前の様子は変だ。それはもう変だ。
　太陽が西から昇るくらいへんだ！」
力説する七倉。その隣で、歩むがしきりにうなずいている。
だからなんなんだその連携！！なんか無性に腹立たしいぞ！？
「お前らな……」
「とまぁ、冗談はここまでにして本題に入ろうか」
「今のが冗談だったと言うのかお前らは！？」
「半分は本気だな」
友達やめてやろうかと考えた俺を誰が責められよう？いや、誰も責められまい。
「で？何があった？」
今までのふざけた表情を一変させて尋ねる歩。七倉も、もう笑ってはいなかった。
ったく……散々言いまくった挙句にその流れは反則だろう？
まぁ、もともと相談するつもりだったのだからそれはそれでいいのだけど。
ただ、どうにも二人の手のひらで遊ばれているような感覚が嫌なのだけども……
「実はな……」
結局相談してしまうあたり、俺がこいつらを信頼しているという証

拠に他ならないわけで。
まともな答えが返ってくるとは思えないのに、妙な期待をする自分がいたりしたわけだ。

「なるほどな」
話はじめて15分と少々。別段面白い話でもないのに、この二人は始終聞き入っていた。
まずは俺と奈菜の関係。（歩がここにやたら興味を示してきたが完璧に無視した）
次に俺がピアノを弾けると言うこと。（ここには七倉が興味を示したがこちらも無視した）
最後に奈菜からのバンドへの誘いのこと。話しながらもどうするかを考えてはみたが、まったく決められなかった。
「しかし、お前の周りにはどうして女子が集まるんだ？」
「誤解を招くような発言はやめろ」
初っ端から話をそらす歩に、もはやため息しか出てこない。こいつは何を聞いていたんだ？何を？
お前の頭には脳みそがしっかり入ってるんだろうな？
「水野の異常な体質は置いておいて……」
おいこら！勝手に人を異常体質者にするなよ！！俺はいたって普通の人間だ！！
「ようするに、お前は人前で演奏するのが嫌なわけだ。だけど朝倉の頼みを断るのも気が引ける。更には自分も少しは興味がある。違うか？」
なぜ俺の感情を寸分の狂いもなく読み取れるのか、という質問は後日するとして。七倉の言うことは全てその通りだ。
俺自身興味が無いわけではないのだ。むしろ参加したい気持ちが強い。

それでも人前での演奏と言うフレーズに、どうしても気後れしてしまうのだ。
「そこまで分かってるなら的確なアドバイスはあるんだろうな？」
「そうだな。強いて言うなら……いや、ここは九条に任せてみよう。さっきから捨てられた犬のような顔をしているしな」
その言葉に歩を見てみると、なるほど、確かにそんな顔をしていた。
「お前ら……実際傷つくぞ……」
「いいから意見があるなら何か言えよ」
さっきの仕返しだとばかりに、歩の意見は軽く無視。
「まぁいい。そうだな。俺がお前に言えることとしては……」
後に思う。このときこいつらに相談したのは正解だったんだと。

第１５話

～第１５話～

翌日放課後。
今日も俺は第３音楽室に来ていた。ピアノは弾いてはいない。
かと言って、他にやることがあったわけでもない。ただなんとなくこの空間にいたかっただけ。
この部屋を見つけて以来、一人になりたいときや、考え事をしたいときにはいつもここに来ていた。
誰も来ない静かな場所だということもあるが、それよりもこの音楽室独特の雰囲気が好きだった。
窓際の椅子に座りぼんやりと外の風景を眺める。グラウンドではサッカー部や野球部が練習を行っていた。
入学した頃に部活に入ろうと思わなかったわけではない。ただなんとなく入る気になれなかった。
周りには家事があるからと言い訳をしていたが、実際部活をするくらいはどうとでもなったのが実情だったりする。
それでもやはり、俺の気持ちは部活には向かず、だらだらと毎日を過ごすのが当たり前になっていた。
そんな俺にとって今回の誘いは渡りに船なのかもしれない。
何度も言うように、別にやりたくないわけではないのだ。ただ興味がおきないのと、今一歩踏ん切りがつかないだけ。
ゆえに俺の気持ちは奈菜とバンド活動をしたいという方にだいぶ傾いていた。ただ決定打がない。
人前で演奏をするという壁が立ちふさがる。
「やれやれ……」

自分の優柔不断さにあきれてしまう。やりたいならやればいいのに、それすらも決められない。
昔からそうだった。肝心なところで自分の意思が貫けないのだ。あの時も……
「あの時？」
自分の考えていたことに思わず突っ込みを入れる。あの時っていつだ？一体なんのことだ？
一瞬だけ頭をよぎった場面はすぐに思い出せなくなってしまった。
この感覚……確かこの前も……
なんとか思い出そうと試みていたが、それは教室の扉を開ける音により中断された。
「やっぱりここにいたんだね」
「奈菜か……」
「あれ？もしかして邪魔だった？」
「別にそういうわけでも……」
「その顔を見ると、すごく考えてくれてるみたいだね」
「まあ、それなりには」
案の定、というべきなんだろうな。ここにいればおそらく奈菜が来るような気はしていたのだ。
欲を言うなら来るまでには結論を出しておきたかったんだけど……
「早速だけど聞いちゃってもいいのかな？」
「早速すぎやしないか？」
「私としても、出来れば結論は早く欲しいのですよ♪」
そう言って苦笑する奈菜の顔は、なぜかすごく可愛く見えた。夕陽に照らされた髪の一本一本がまるで光を放っているようでもあった。って何を考えてるんだ俺は。頭の使いすぎでどうにかなってしまったらしい。
「どうかした？」
「いや、なんでもない」
まさか本人に伝えられるわけもないので軽く言葉を濁す。早く話題

を変えなければ。奈菜は妙なところで聡い。今までそれのおかげで何度肝を冷やしたことか。
「バンドことだけどさ。実はまだ結論は出てないんだ」
「ん～、やっぱりそっか」
さも分かりきっていたといった表情を浮かべた奈菜は、それでもどこかで期待していたような呟きをもらす。
「香介君のことだからね。すごく考えても結局結論は出せないと思ってたんだ」
「さりげなく失礼なこといってないか？」
「あはは♪そうかもね。でもさ、香介君と知り合ってからまだそんなに長いわけではないけどね、香介君が思ってるよりいろいろわかってるつもりだよ？」
「そりゃどうも」
そんなことを臆面もなく言うのはやめて欲しい。照れるじゃないか。
「だからね。その上で香介君に参加してもらいたいんだ」
その言葉に何かがはじけた気がした。心のどこかで引っかかっていた最後の壁。それが今はとてもくだらないことようにすら思えた。
「なんてね。無理言ってるのはわかってるからゆっくり考えてよ♪」
気づいたときには踵を返して音楽室から出て行こうとする奈菜の後ろ姿に一言だけ告げていた。
「やるよ……」

これが俺にとっての高校生活の始まりだったのかもしれないと、改めて考えてみるとそうそう思える。
それくらいこれから始る生活は楽しいものだったのだから。
もっとも楽しいことだけではなかったけども……

第１６話

第１６話

現在時刻は午後１０時。ベッドに横たわってからおよそ１時間。特に何かをする気にもなれなかった。
あの後の奈菜の喜び方といったら……
見てるこっちが恥ずかしくなるくらいに喜んでいた。最後のほうにはそれが泣きに変わるもんだから正直たまったものではなかった。
もちろん嬉しくないわけではない。自分の加入によりあれだけ喜んでいるのだ。そこに関して不満などあるはずもなかった。
しかし不安もある。今まで誰かの前で演奏したことなど皆無であり、その場でのプレッシャーを考えただけで冷や汗すら出てくる。
「考えてもしょうがないのかな……」
いまさら後には引けないのだ。それに確かに不安もあるが楽しみでもあるんだ。
今まで一人でやってきたからこそ、誰かと一緒に演奏するのが待ち遠しい。
「寝るか……」
なんでも明日の朝は朝練を行うらしい。奈菜のあのはりきり方からして行かないわけにもいくまい。
まぁ、行かないなんてことはないけどな。人前での演奏はともかく、誰かと一緒っていうのは楽しみなのだ。
それに明日の朝練には奈菜が誘ったもう一人のメンバーも来るらしい。
誰なのかは知らないが、悪いやつではないだろう。それも楽しみな理由のひとつでもあった。

明日に備えて寝るとしよう。目を閉じると心地よい睡魔がすぐに襲ってくる。
俺は明日への期待を感じつつ眠りに落ちるのだった。

目を開けると、そこに広がっていたのは圧倒的なピンク。
体のほわほわした感覚からすると、どうやらここは夢の中らしい。
何か夢だってわかるのって変な気分だよな。
「こうすけ君？」
そんな気分に浸っていたところに誰かから声をかけられる。少なくとも俺は自分が呼ばれたものだと思った。
「……ちゃん」
見るとさっきまでピンクしかなかった景色の中に、二人の人影が浮かび上がっていた。
「あのね……私ね……」
一人は女の子。小学生くらいだろうか。少し長めの髪をツインテールにしている。
まわりの風景に溶け込んでしまいそうなピンクのワンピースに身を包み、何かを決心したかのような表情でもう一人に話しかけている。
「どうしたの？」
もう一人は男の子。こちらも小学生らしく、まだ幼さの抜けない顔で女の子の言葉の続きを待っている。
待てよ？この光景を俺はどこかで見たことがないか？確かあれは……

ぴぴぴぴ……

「っ……」

耳元において置いた目覚ましがけたたましい音で俺を眠りの世界から呼びもどす。

俺をもう一度寝せようとするかのように瞼が抵抗を続けているが、それを押しのけてどうにか目覚ましのスイッチを切ることに成功した。

「朝……か……」

夢を見ていた気がする。だけどそれは、すくいあげようと記憶の海に伸ばした手のひらの隙間からすぐにこぼれていってしまった。

何かすごく大切な夢だった気がする。絶対に思いださなければいけない何か。

「無駄か……」

いくら思いだそうとしたところで、一度忘れてしまった夢を思い出すなんて無理な話だ。

それよりも今はしなければならないことがある。そっちに力を注いだほうが建設的というものだ。

「さぁ、朝練に行くか」

遅刻をしないように早めに寝たのだ。無駄なことを考えてないで準備をしなければ。

そう思えば後は体を動かすだけ。着替えを済まし、朝食をたいらげ、ものの２０分ほどで家を出ることに成功する。

見上げた空は今日も眩しかった。

第17話

～第17話～

朝の音楽室に来たのは高校に入学してから初めてだった。もっとも、いつも遅刻との勝負といった感じの俺にしてみれば、こんな朝早くに学校に来ていること事態がはじめてのことなのだ。それでもちらほらと生徒の姿は見受けられる。おそらく他の部活の部員だろう。

我が晴嵐学園はそこそこに部活動が盛んなのだ。毎回どこかしらの部活が全国大会に出場を決めている。

もっとも、そういったことに全くの興味がなかった俺は、いつも無視を決め込んでいたのでどこの部活が強いのかといった情報はほとんど持ち合わせがない。

それなのにだ、朝の貴重な睡眠時間を削ってまで練習しているやつらの頭の作りを疑っていたくらいの俺が、まさか自主的に朝練に参加するとは、いやはや世の中なんてちっともわからないものである。

指定された集合時間は7時半。現在時刻は7時15分。

どういうわけかこんな時間に来てしまった。こんなことならもう少しゆっくりと朝飯を食べてくればよかったかもしれない。

あまり利用者がいないせいか、常にほこりっぽい音楽室の空気を入れ替えるために窓を開けながら、いつもと逆のことをしている自分に思わず苦笑してしまう。

開け放った窓から流れ込んでくる風が心地よい。春だというのに妙に暑さが目立つ今日この頃だが、

明け方の気温はちょうど良く、少しでも気を緩めればすぐにでも眠

ってしまいそうだった。

それからしばらくして、集合時間ぴったりに奈菜がやってきた。ここまで時間にぴったりだと、何か突っ込んでやりたい気もしたが、それよりも先にもっと突っ込んでやりたいことがあったので、奈菜の体内時計に関してはこの場で触れるのはやめておくべきだろう。

「まさか香介君が私たちより先に来てるなんて……」

確かに奈菜は昨日の時点で、もう一人のメンバーを連れてくるとは言っていた。俺もそれが誰だか気になっていたのは事実だ。だが、まさかその人物が今目の前にいる人だとはまったく予想もしていなかった。

「紹介するね。藤本百合ちゃん。今回私たちに協力してくれる頼もしき助っ人だよ♪」

「ふふふ～♪驚いた？」

驚いたどころの話ではない。こんな組み合わせは想定外すぎる。

「あれ？百合は香介君と知り合いなの？」

「一緒のクラスで隣の席だよ～♪」

「なんだ～。言ってくれればよかったのに」

「香介君を驚かせたいじゃない？」

とまぁ、二人はほうけている俺をそっちのけで会話に花を咲かせ始めた。俺はといえば、ようやく目の前の組み合わせに頭がついてきたみたいだ。

「二人は知り合いだったのか？」

「うん♪お友達だよ♪」
「そうは言っても、まだ日にちは浅いけどね」
何でも、メンバーが辞めてしまい新たなメンバーを探していた奈菜だったが、大抵の生徒は部活に入ってしまっていたらしい。
そこに百合が転校してきた。いちるの望みをかけて勧誘してみたところ、百合は一発ＯＫをしてくれたとのことだ。

「本当に百合には感謝してもしきれないよ」
「別に気にすることじゃないと思うんだけどな」
百合はそう言うが、奈菜としてはそれは嬉しかっただろう。それは昨日、俺が承諾の返事をしたときのリアクションでよくわかっている。
何はともあれよかったよかった。奈菜が選んだ人材だからと思ってたとはいえ、よくわからない奴だったらと危惧しなかったわけではないのだ。
しかしどうやらそれも杞憂だったようだ。百合ならまったくのノープロブレム。むしろ歓迎物だからな。

「それじゃあ、早速だけど練習しようか！」
「そうだね。せっかくの朝練だもん」
時計を見ると、集合してからすでに１５分ほどが経過している。わざわざ早起きしたのだ。時間を無駄にするのももったいない。

「ところで練習って言っても何をするんだ？」
「それなんだけどね……」
いくら練習すると言っても、何を演奏するのかがわからなければ始

らない。しかし奈菜はそれはしっかり考えてきていたようだ。
流石と言うか、自分で誘ってきたことだけはある。

「私が考えた曲なんだけどね、とりあえずいろいろアレンジは加えてみたんだ」

奈菜はしっかりと俺と百合の分の楽譜をコピーしてきてくれていた。
ざっと目を通してみて思う。
なるほど、これだけの作品を考えられるのだ。バンドを続けたいと思うのも納得できる。

「すごいね～」

どうやら百合も同じような感想を持ったらしく。隣で歓声をあげている。まだ演奏したわけではないからなんとも言えないが、おそらく並以上のものには違いない。
しかし、どうやら話はうまくは進まないらしい。次の奈菜の一言により俺はそれを嫌と言うほど思い知ってしまったのだから。

「この曲を来週までに完璧にするからよろしくね♪」

このときの俺と百合のほうけた顔を誰か写真にでも撮っていたらと今でも思う。
それほどまでに奈菜の一言は破壊力抜群だった。

第１８話

～第１８話～

春だというのに昼が近づくにつれ気温は上昇線を描き、いい感じに上がっていく。
これも地球温暖化の影響なのか？頑張れ地球！応援してるから！！
などと考えながら退屈な授業をやりすごしていた俺だが、ひとつの懸案事項が頭から離れないでいた。

「来週かよ……」

今朝方に奈菜により伝えられた言葉。顔合わせから一週間で曲を完成させるときたもんだ。
俺でなくてもため息のひとつくらいつきたくなるだろうよ。
教科書に目を落としてもう一度ため息。別に教科書の内容をみているわけじゃない。
そんなもの見たくもないからな。
じゃあ、何を見ているか。奈菜から手渡された譜面である。
何度見直してみてもたいした出来だ。これだけの出来であるからこそ、練習時間も相当にかかるだろうし、何より中途半端なものにはしたくない。
どちらかと言うと、後半部分の方が比重は重い。
ん？そういえば何で来週までなんだ？期限に気をとられてそこを聞いてなかったな。
来週だろ？なんかあったけかな？

「来週は創立祭があるでしょ～♪」

昼休みになり、なぜか今日も百合と一緒に昼食を食べていた。場所も同じだったりする。
百合はこの場所がいたく気に入ったらしく、俺の後をひょこひょことついてきたのだった。
それは別に悪いことじゃないんだが、他の男子からの視線が痛い。
しかも本人はまったくの無自覚だからな。
月のない夜には気をつけたほうがいいかもしれない。
で、上のせりふに戻るわけだが、今のは百合のせりふだ。俺はまったく忘れていたわけだからな。

ここで創立祭について少し説明しておこう。まぁ、説明と言ってもたいしたことは何もない。
ただ単に、何十年前だかに我が晴嵐学園が創立された日が来週にあり、それを祝おうではないかというイベントだ。
大抵の高校はこんな日は休みになるんだろうけどな。まったくうちの校長は何を考えてるんだか。
最後の方は軽い愚痴になったがそんな感じだ。もっと簡単に言うなら文化祭の規模が落ちたようなイベント。
うん、これならわかりやすいんじゃないか？

「そこで演奏しようってわけなのか？」
「奈菜の計画ではそうみたいだよ？」

ちょっと大変だけどね。そう付け加える百合だが、実際ちょっとどころの話じゃない。

まったく、奈菜も何を考えているのやら。

そんなこんなで放課後だ。集合場所は第３音楽室。俺の秘密の場所だったんだけどな。
奈菜に遠まわしにぼやいてみれば、いつからこの部屋は香介君の部屋になったのかな？と、一蹴だ。
やれやれ。新しい部屋を探さないといけないな。

「それじゃ、早速練習しようか」
「来週だもんね！頑張らなきゃ！！」

確かに今は話している時間すらもったいない。創立祭に間に合わせることを考えれば、今週中には形にしないといけないのだから。

「まずは個人練習。最後に合わせるからね」

奈菜の一声で練習は始まった。ここで俺たち３人の役割を紹介しておこう。
言うまでもなく俺はキーボード。それしか出来ないからな。百合はドラム。人は見かけによらないというかなんというか。
正直、出来るのか？とも思ったが、練習開始１０秒でそんな気持ちは吹き飛んだね。リズムから叩き方まで相当のレベルだ。
いったいどんな練習をすればあんなになるのか教えてほしいものだ。
最後に奈菜。はっきり言おう。こいつは次元が違う。なんと、一人でボーカルとギターをこなすというのだ。
お前はいったいなんなんだ？実はサイボーグとかじゃないだろうな？

練習は思いのほか順調に進んだ。奈菜は前から練習していただけあってほぼパーフェクト。
百合も無難にこなしている。俺はといえば、

「香介君ずれてるよ」
「ああ、悪い……」
「香介君ちょっと早い」
「気をつける……」

今まで一人でやっていたつけなのか、さっぱり2人に合わせられないのだ。
何度やってもどこかがずれる。間違えたところを修正すれば他を間違える。さっきからその繰り返しだ。

「大丈夫だよ！まだはじめたばっかりなんだから！！」

奈菜の励ましが、逆にむなしく感じるのは何でだろうな？

結局、下校時間まで練習したが俺は合わせることが1度もできなかった。

第１９話

～第１９話～

―ぼすっ

家に帰った俺は荷物を投げ出し、そのままベッドにダイブした。
疲れた。まさにその一言につきる。こんなに疲れたのはいつぶりだろうか？まったく、いかに楽して過ごしてきたかがよくわかるよな。なんて苦笑をもらしながら、今日の練習について振り返ってみることにする。

奈菜の完璧なギターとボーカル。百合のテンポのよいドラム。俺のずれまくりのキーボード

だめじゃん俺……。

まったく出だし最悪だよ。二人は気を使ってくれたのか何も文句は言わなかった。
まぁ、あの二人が文句を言うとは思えない。そういう性格だからな。だからこそ余計に自分のふがいなさが情けない。このままでは俺のせいで来週には間に合わないだろう。
やると言った以上、それは絶対に避けたい事態だ。

「しかしどうしたもんか……」

練習と言っても、曲をあわせるのは一人ではできない。
曲自体は8割がた弾けているのだから、単独での練習の効果はあまり期待できそうにない。
八方塞とはこのことだ。
いや、正確にはもうひとつ手はある。正直これを選ぶのは相当嫌なのだが……
背に腹は変えられないよな……

「それで、俺のところに来たというわけか」
「来たくはなかったがな」
「何、そう遠慮するな。俺とお前の仲だろう？」
「気色悪いことを抜かすな」

肩にまわされる七倉の腕を振り払う俺。まったく、俺にそんな趣味はない。だからあんまり来たくなかったんだよ。

「しかし解せんな」
「何がだよ？」
「お前は俺が最終手段だと言ったが、本人達に頼めば一番だろう？」

そちらの方が効率もいいだろうしな、なんて言われなくてもそんなことは一番俺がわかってるんだよ。
演奏するのは当然の話、七倉とではないのだ。
だったらそんなやつと練習するよりも、奈菜たちに頼んで練習したほうがいいに決まってる。
だけどそうはいかない理由は、

「なんか、かっこつかないだろう……」
仮に頼んだとしても、奈菜と百合が断ることはないだろう。むしろ積極的協力してくれるはずだ。
だからこそ、それをするのはなんとなくためらわれる。
男ってのはそういう生き物なんだよ！！プライドが大事なんだよ！！
「お前のよくわからんこだわりは置いとくとしてだ」
おいこら！置いとくなよ！そこそこ重要なことなんだぞ？
「そんな見栄を張って失敗では目も当てられんな」
「余計なお世話だ」
七倉のいうとおりなものだから気に入らない。というかこいつに言われると妙に腹が立つのはなんでだろうな？
きっと日ごろの行いのせいだろう。そうに違いない。
「で、協力してくれるのか？」
「他ならぬ水野の頼みだからな」
「そうかよ」
やれやれ。何で返事をもらうだけでこんなに苦労せねばならんのか。
どっと疲れたよ……
「貸しはいつか返してもらおう」
……やっぱり素直に奈菜たちに頼むべきだったかもしれない。
まぁ、今更のなのでそんなことは言わないがな。さて、今日の放課

後までに少しは形にしなくては！！

で、練習開始から２０分後。

「合わんな」
「だよな……」
「合わせるきはあるのか？」
「あたりまえだろうが」

何度やっても合わない。昨日よりかは多少ましになった気もするが、それも気休め程度だ。
というか七倉。お前は何でそんなにそつなく演奏してんだよ……

「それが俺が俺であるゆえんだ」

勝手に言ってろよ。やれやれだ……
しかしどうしたもんかね。何か画期的な解決策があればいいんだがな。
人生はそう、うまくいくようには出来てないってことなのか……
お先真っ暗だよ。というわけでもう一度言わせてくれ。

――やれやれだ。

第２０話

～第２０話～

――ザ～

春先の風に髪がなびく。少し伸びてきたな……
顔にかかる髪を耳にかけながらため息をひとつ。

あ～あ、うまくいかね～や。

昼休みの喧騒に巻き込まれたくなかった俺は、先日、瑠璃から教えてもらったあの場所に来ていた。
もちろん人は誰もおらず、考え事をするにはもってこいの環境だ。

風が心地よい。いっそのこと、このまま何もかも忘れてこのまま眠ってしまいたい。
まぁ、そうも言ってられないのが現状なわけだが、この時ばかりはそう思いたかった。

これも今まで一人やってきたつけなのかね。きっかけすらつかめやしない。
練習開始からまだ2日といえばそれまでの話なのだが、周りが出来て自分が出来ないとなると気分的に憂鬱になってくるってもんだ。

目を閉じて曲を頭の中に思い描く。リズム・強弱・音階、すべてに気をつけ脳内で組み立てる。

また風が髪を揺らす。ええい、くすぐったい。自分の髪と戯れて何をやってるんだろうね俺は。
おまけに桜まで飛んできやがった。だからくすぐったいと言っているんだ！
結局、集中することも出来ない俺が睡魔によって撃沈されるのにそう時間はかからなかった。

――～♪～♪～

どこかで音楽が鳴っている。あ～、この曲って俺の好きな曲だよな～。

――～♪～♪～

結構近くか？というかなんか違和感が……

――～♪～♪～

振動も一緒にする……。ってことは、

「もしもし」
『やっと出た～！！もう！今どこにいるの～！！』

寝起きの頭に響きわたるは奈菜の声。声がでかいぞ。

『ふ～ん、そういうこと言うんだ。今、何時なのかな？』

嫌な予感はしたんだよ。そんなことを言われる時点で、俺が思って

る時間じゃないのは明白なわけだからな。
自分の時計に目を落とし確認してみる。

「17時45分？」

『疑問系じゃなくてそうなの！！いいから早く音楽室に来て～！！』

わかったからそんなに怒鳴るな。耳が壊れる。
電話を切り、大きく伸びをひとつ。やれやれ、どうやら完璧に熟睡してしまったようだ。
ふと空を見上げてみれば、すでに太陽は沈みかけ、桜を真っ赤に照らしている。
奈菜と百合には後で思いっきり詫びるとして、明日なんて言い訳すっかな。

「それで、どうして遅れたの？」
「いや、昼寝をしてたらな…」
「寝過ごしたってわけ？」
「面目ない……」

というわけで現在、奈菜にこってりしぼられてるわけだが、いかんせん俺が悪いのだから反論のしようもない。
百合が隣でくすくす笑ってるのがせめてもの救いかもな。
正直、可愛い……

「もう、何鼻の下伸ばしてるのよ～」

そう言うと、奈菜は俺のほっぺたを引っ張り始める。
やめてくれ、伸びて戻らなくなったらどうするんだ！？俺のほっぺ

ったは結構繊細なんだぞ！？

「そのくらいにしてそろそろ練習しよう？時間も押してるんだしね？」

流石は百合。絶妙なタイミングだ。正直俺のほっぺたももう限界が近かったからな。

あ～あ、赤くなってるよ。

「む～、しょうがないね。香介君の罰ゲームは後回しにしよう」

待て待て。なんだその罰ゲームとやらは。確かに遅れたのは俺だがな、

「さ、二人とも今日も頑張るよ～！！」

仕方あるまい。謹んで受けようじゃないか。正直なところ、俺が音楽室に入ってきたときの奈菜の顔を見たときからそれなりのことはしようと思ってたんだからな。

誰だってそう思うだろう？俺が扉を開けた瞬間にあんな嬉しそうな顔されたらさ。

第２１話

～２１話～

　果てさて現在俺はコンビにいる。ちなみに時刻は午後の９時。
手にはお弁当と飲み物。ここまで書けば察しのいい人は気づくだろうな。つまるところ夕食を買いに来たわけだ。
なんのことはない。ただ今夜は母さんが夜勤ということで作るのがめんどくさかったというわけだ。家に帰るのも遅かったしな。

「ありがとうございました。またお越しください」

店員のマニュアル通りのせりふを背に店を出る。

――寒い

昼の暑さはどこへやら、日が沈むと同時に下降線を描いた気温は、長袖のシャツ一枚で家を出た俺に容赦ない攻撃をしてくれている。
まったく、少しは気を使って欲しいものだ。

　ぽてぽてと家に帰りながらも考えるのはやはりバンド活動のことばかり。
七倉に練習に付き合ってもらった成果なのかどうかは知らんが、少なくとも昨日よりかはようくなったのは事実だ。
もっとも完成には程遠く、このままでは恥をかくだけなのは言わずもがなだ。

盛大にはいた溜息は誰にも聞かれずに夜の闇に消えていく、はずだったのだが、

「大きなため息だね～。お爺ちゃんみたいだよ？」

振り向いた先にいたのは奈菜だった。

「こんばんは♪」

どうやら奈菜も買い物をしていたらしく、手には俺が行ったコンビニとは違う袋を持っている。入っているのはアイスみたいだな。

「どうしたんだ、こんな時間に？」

「少し気分転換もかねた散歩かな？」

こんな時間に女の子一人で散歩とはいかがなものなんだろうな？あまりお勧めできたものではないと思うのだが。

「それもそうだね～。でも今は香介君がいるし問題ないよね♪」

違う意味で大問題です。特に俺が。もちろんそんなことは言うはずもない。変態扱いされるのはごめんだ。

「あ～、いやらしい顔してる。もしかしたら一人より危ないかも」

くすくす笑うその顔に一瞬見惚れてしまった俺を誰が攻められよう。実際、奈菜の人気は高いのだ。その人当たりのよさから、大半の人間に好かれる。学校で見る奈菜の周りにはいつも誰か友達がいるのがその証拠だろう。

俺とはえらい違いだな。

「さ、早く帰ろう？」

アイス溶けちゃうよ、なんて冗談を言いながら歩き出す。というかこれって送って行く事は決定事項なのか？
そりゃここで一人で帰れなんて言うつもりはないのだが。俺としてもまだ夕飯を食べていないので早く帰りたい。

「夜道を歩くのってなんかいいよね？なんでもないのに気持ちが高揚としてくるの」

我慢しようじゃないか。俺も思春期真っ盛りの健全な高校生だ。このシチュエーションが嬉しくないわけない。
それに今の言葉で気づいたが、少なからず俺の気分も高揚としているようでもある。

「寒くないか？」
「寒かったらアイス買いに行こうなんて思わないよ」

確かにな。まぁ、俺だったらたとえ食べたくてもかったるくて買いに来ようとも思わない可能性が高いのだが。

「好きなもののためには頑張れるんだよ、バンド活動みたいにね」

その一言は俺の何かに引っかかるものがあった。もやもやとした何か。
その引っかかりを必死に手繰り寄せようと試みてみるが、もちろんうまくいかない。大体こういう時っていうのはうまくいかないもんだよな。
それがお約束みたいなもんだよ。

「奈菜は本当に音楽が好きなんだな」
「そうだね。きっと好きなんだろうね」
きっととはっきりしない台詞だな。てっきり、大好き、とかいうものだと思ったんだがな。
「もちろん好きだよ、大好き」
じゃあ何でそんな微妙な反応？
「どうしてだろう？私もよくわかんないや」
わかんないという割にはすごい笑顔だな、おい。でもなその顔を見て思ったのは、あ～、やっぱり奈菜は音楽が大好きなんだということだ。
その笑顔がそれを十分物語ってるさ。じゃあ、俺はどうだ？果たして俺は本当に音楽が好きなのか？
「送ってくれてありがと」
「ん？」
見ればすでに奈菜の家に到着しているではないか、いつの間に。
「じゃ、おやすみなさい♪」
「ああ、おやすみ……」
もしかして俺、考えすぎて奈菜の話をシカトしたりしてないだろうな？もしそうなら最悪だぞ？

「あ、それからね」
「どうした？」
次の言葉は正直、今日一番俺の胸を突いた言葉だったと思う。
「笑顔、笑顔♪笑って一日を終わろうね♪」
家に入っていく奈菜の背中。あんなに大きく見えるのはなんでだろうな？そんなもんはわかっているさ。
俺がガキで奈菜が大人、いや、そこまではいってなくても俺の何歩も先を行っているから。
星がきれいだな……

第２２話

～第２２話～

時間というのは薄情なものである。欲しいと思えばあっという間になくなってしまうくせに、早く過ぎて欲しいときに限ってやたらと長く感じるのだから。
何でもその原因はひとつのことに集中しているかいないかの差だそうだが、そんな理屈よりももっと時間をくれというのが俺の切実な願いだ。

「今日の練習はここまでにしようか」

音楽室に奈菜の声が響く。今日は土曜日ということで朝から集まって練習していたのだが、気がつけばもう夕方である。

「今日は今までで一番いいできだったよ♪」
「そうですね～、これなら間に合うと思います」

そりゃ二人はそうだろうさ。最初からパーフェクトに近い演奏をしてたわけで、あわせるのもそれほど苦ではなかったみたいだしな。
それに引き換え俺はといえば、新たな曲を演奏することに手こずり、さらには合わせることが全然できず、３人での練習に加えて七倉との練習と倍の練習をしてかろうじでついていってるくらいだ。
実際ついていけてるかどうかは定かではないのが悲しい……

「ほら、香介君も早く片付けて～」

「ああ」

なんとなく気の抜けた声。疲れたんだよ。最近ずっと来週の創立祭のことばっか考えてるからな～。

しかも頭に浮かぶのは本番で失敗するというネガティブな展開だし、やたらと詳しい情景まで思い描くことが出来る。

泣いてる奈菜の顔だとかな……。これが現実になったらと思うと最悪極まりないわけなのだが、あいにく今の俺にそうならないと断言できる自信などまったくないのがさらに困ったところである。

「大丈夫ですか？」

ほら見ろ、そんなことばっか考えてるから百合に心配されてるじゃないか。ここは俺の最高のスマイルで、

「もちろん大丈夫だ」

「すんごい嘘っぽいんだけど……」

おい奈菜、一刀両断でぶった切るなよ。俺の渾身の笑顔を返せ。

「さ、帰ろう♪」

軽く睨んでみたが、そんなものはどこ吹く風邪といった感じだ。まぁ、そうだろうさ。別に俺も本気で気に障ったわけじゃないからいいけどさ。

少しくらいなんか反応してくれよ。

すでに日がほとんど沈みかけている道を3人で下校する。他の部活もちょうど終わった時間らしく下校する生徒はそこそこに多い。そんな生徒からの視線（主に運動部の男子）が相変わらず殺意に満ちているのは今回もスルーだ。
理由が簡単にわかるからな、下手に反応して余計な面倒を起こしたくはない。

「じゃあ、私はここで失礼しますね」
「うん、またね～♪」
「じゃあな」

帰る方向こそ一緒だが、百合とはあまり家が近いわけではないので早めに分かれることになる。送っていこうかと言ったこともあるのだが、やんわりと断られてしまったのは記憶に新しい。
違うとは思うが信用されてないのなら悲しいことこの上ないな。

「ねぇ、香介君……」

どうした？なんだか声のトーンが心なしか落ちているがどうかしたのか？

「あの……」

何かを言おうとしているようだがうまく言えない、そんな感じなのか口を開けては閉じの繰り返し。
そんな様子を見て、えさを待つ鯉みたいだと思ったなんてことはないぞ。面白くてついつい眺めていたなんてことはもっとない。

「何で笑ってるの～」

いかん、顔に出ていたようだ。あわてて顔を引き締める。

「結局何が言いたいんだお前は？」

「だから、その……」

なぜか顔を背ける。なんか可愛いじゃないか。ちょっと待て？なんだこのこそばゆい感覚は！？まさかこれはすんごいフラグが来てるんじゃないか？

な～んてね、そんなわけあるはずがない。まさか奈菜に限ってそんなことは、

「明日一日私に付き合って！！」

あったよ。

「明日か？」

「何か予定とかあったかな？」

「いや、練習をしなければとは思うがそれ以外は…」

「じゃあ明日の朝、駅前に9時に来てね！！」

言うが早いか脱兎のごとく走り去る奈菜。俺まだ返事してないんだけど。

しかしこれはどういうことなんだ？男女で休みにお出かけ、つまるところデート？よし、夢だ、これは夢だぞ。

いや、現実を見ようじゃないか。奈菜はただ付き合ってといっただけでデートとは一言も言ってないじゃないか。

下手な推測はやめよう。明日になればきっと全部わかるさ。

こうして俺の空白の予定表に奈菜とお出かけという予定が刻まれた

わけだ。やれやれ、どうなってしまうんだろうね？

第２２話（後書き）

久しぶりにあとがきを書いてみようと思います。
連載を再開してからというもの、読者さんが増えているようで大変嬉しく思ったりしています。
その分多少のプレッシャーは感じますが、やはり読んでもらえるのは嬉しいですね♪
自然と気合も入ります。
さて、ここで少しお願いなのですが、もし読んで下ってお時間がありましたら短くてよいので評価のほどをつけて頂けたらと思います。
やはり客観的意見も取り入れて、よりより作品にしたいと思いますので、何卒よろしくお願いします。

第２３話

～２３話～

果てさて、そんなこんなで俺は今駅前に向けて歩いているところだ。
理由はもちろん奈菜からの呼び出し。昨日の帰り道での光景がまだ頭にこびりついて離れない。
期待していいのか？
そもそも俺も奈菜も健全な高校生であり、休日に男女二人で出かけることの意味くらい知っているつもりだ。
いわゆるデート。
そのことを考えてたおかげで昨夜の睡眠はまったくよろしくなかった。おかげで出掛けに鏡の前でクマと一戦交えることになってしまったのだ。
もちろん敗北したのは言うまでもない。

駅前までは自転車で大体１０分弱くらい。９時に集合と言われたので、とりあえず１５分前くらいにはつくようにしてみた。
やっぱりこういうときに女の人よりも遅く来るのはよくないと思うんだよな。もっともこれ以上早くするのは、俺の起床時間を考えると不可能。

これで奈菜よりも後だったらどうしような。まぁ、１５分前だし誘ってきたのはあっちなんだから俺が責められる理由はないのだが。あれやこれやと脳内で思考をループさせていると、駅に付属している自転車の駐輪場が見えてきた。
ぶっちゃけその辺に止めといてもいいんだが、以前それで回収されて余計な出費を余儀なくされたことからなるべく駐輪場にとめることにしていた。
そういうわけで今日もしっかり１００円を支払いそこにとめることにする。えらいぞ俺。

高鳴る鼓動を少しだけ意識しつつ待ち合わせ場所に歩を進める。
そこまで大きな駅でもないので人を探すのにそれほど苦労する心配はない。
もし先に来ていたとしても簡単にみつかるだろう。案の定すぐに見つかった。改札の傍の大きな木。
その目に付きやすさからたびたび待ち合わせに使われる。地元の住人にとってはなじみの場所になっていると言ってもいい。
そして奈菜も例に漏れずにそこにいた。いたのだが、

なんか囲まれてる？

奈菜の周りには、なんだか絵に描いたような明らかなナンパ野郎が１，２，３人。休日の朝から暇な奴らもいたものだ。
さて、ここでの俺の行動はどうするべきだろう。

1. かっこよく助けに
2. とりあえず傍観
3. 救援を呼ぶ
4. テレパシーを送ってみる。

自分で出した選択肢だけど４番の意味がわからない。というか送ったところでどうしようというのか。どうやら朝の糖分摂取が不十分のようだ。
後でチョコでも買って食べたほうがいいかもしれない。
俺が一人で脳内漫才をしているうちにも、あちらはあちらでお話が進んでいるようだ。見れば男の一人が奈菜の腕を掴んでいる。
というかどこまでベタなんだお前達は。見た目もならやることまでベタとは始末におえん。
仕方ないな。
「悪い奈菜。少し遅れたみたいだな」
あくまでもわざとらしく、それでいてさりげなくが俺のモットーだ。
「遅いよ……」
少し拗ねたような声だが、明らかに顔が安堵している。もう少し早く助けるべきだった、というかもう少し早く家を出るべきだと反省するには、十分な表情。
「悪かった。とりあえず行こう」
「うん」
奈菜の手をさりげなくとり、その場から離れようとする。誰か忘れてるって？気のせいだろう。
「ちょっと、待てよ」

ほらみろ、気づかれちまったじゃないか。

「その子は俺達と遊ぶんだよ、後から来た奴は引っ込んでろ！！」

一人の男の声に他の二人が同調するように声をあげる。うっとしいことこの上ない。この状況で幸いなことといえば、俺の影に隠れるようにして様子を伺う奈菜が可愛いってことくらいじゃないか？役得だな。

「わかったらささっと消えろよ」

リーダー格らしい男が俺の腕を掴もうとする。次の瞬間には、男の体はきれいな放物線を描きアスファルトに叩きつけられていた。

「てめっ、なにしやｇ…！？」

「知ってるか？しつこい男は嫌われるんだぞ？」

最後までしゃべらすことはしない。うるさいからな。警察にでもこられたらやっかいだ。

「警告だ。これ以上関わるな」

ちょうど奈菜に顔が見えないように男の顔を睨みつける。直後、男の顔から血の気が引いたようにも見えたが気のせいだろう。

「さて、行きますか」

「え！？あ。うん」

今の光景に呆気にとられている奈菜を再度促し、ようやくその場から離れることに成功。

まったく、初っ端からとんだハプニングだよ。

第２４話

～第２４話～

青色の絵の具を塗りたくったかのように広がる青空。その下を可愛い女の子と一緒に歩く。まさに青春の１ページ。

「香介君って実は強かったんだね～」

何度目だろうかこの台詞は。

「意外な新事実発覚だね～♪」

そんな事実はできることなら永久に発覚して欲しくなかったのだが、運命とはうまくいかないものだ。

「なんにしても助けてくれてありがとう♪」

「別にいいさ。俺がもう少し早く来てればよかったんだからさ」

といっても、さっきも言ったとおり俺の中では相当の速さで集合時間前に来たわけなのだが、結果的にああいう状態になってしまったのだから、俺にも非はあったのだろう。

「そういうところが香介君だよね」

どういうところなのかさっぱりわからない。具体的に説明を頼む。

「わからないところも含めて香介君なんだよ♪」

どうやら答える気はないらしい。まぁ、いいさ。人が人に抱くイメージなんて総じて本人のイメージとは違うものだからな。

気にするだけ時間の無駄さ。

そうは思いながらも微妙に複雑な心境を引きずりながら、二人連れ立って歩くのだった。

「それで、今日の予定をそろそろ教えてもらいたいものだな」

喫茶店に入って15分。一向に今日の目的を話そうとしない奈菜。

いつもの快活さはすっかり身をひそめてしまっている。

というわけで、こっちから聞くことにする。別に嫌なわけではないが、こちとら休みの一日を棒にふっているわけなのだから、理由を聞くくらいの権利はあるはずだからな。

「それは、その……」

「何かいいにくいことなのか？」

「そう言われればそうなんだけど、別にそうじゃないといえばそうでもないというか……」

どっちなんだよ。

しかし、こんな奈菜は本当に珍しい。どちらかといえば奈菜は自分の思っていることははっきり言うタイプのはずだ。瑠璃ほどじゃないがな。

その奈菜がここまで言いよどむのだから、これから話されることはもしかするととんでもないことなんじゃあるまいか？
実は、人間じゃないとか言うオチはやめてくれよ。

「その、笑わないで聞いてくれる？」
「笑わない」
「怒らないかな？」
「たぶんな」
「そっか……」

なんというか、この空気の流れからするとそんなに深刻な話ではなさそうだ。少し安心。

「あのね、私、親と離れて一人暮らししてるって言ったでしょ？」

前言撤回、なんだか嫌な方向に話が流れはじめた。

「みんなには親の仕事の都合って言ってあるけど、実はそうじゃないの」

やっぱり話の方向がよろしくないぞ。これは今から奈菜の秘密を教えられる流れ以外の何者でもない。
あんまりそういうことに首を突っ込むのは好きじゃないんだが。この場合は突っ込まされるって言ったほうが正しいのかもしれないが。

「私がまだ小学校のころだったんだけどね、両親が離婚しちゃったの。原因はいろいろあったみたいだけど、どうにもお母さんのほうに問題があったみたい。詳しいことは教えてもらってはないんだけどね。
それで私はお父さんに引き取られて、中学までは一緒に暮らしてた

の。そしたらちょうど私の高校が決まってすぐにお父さんの転勤が決まって、それで話し合いの結果、私の一人暮らしが決まったの」

簡潔にまとめられた内容だが、ずいぶんと重要な話な気がする。奈菜も苦労してるんだな。

「もちろん最初は反対されたけどね。私はここを離れたくなかったし、お父さんも自分の離婚のことで私に負い目みたいなものがあったからなのか、最終的には一人暮らしを許してくれたの」

親としては苦渋の決断だったろうな。そのときの奈菜の父親の葛藤を考えると同情を禁じえない。

「お父さんと離れて暮らすようになってから1年間。最初は大変だったけど、特に問題もなく過ごしてくれたのかな。結構楽しかったしね」

にへりと笑ってみせる奈菜。ここまで聞いた話はどれも初耳であり、興味深いものではある。ただ、これが俺にどう関係してくるのかまったくわからない。

むしろ関係して欲しくないのが本音だ。すんごくめんどくさいことになりそうだし……。

「こんな話をしたのはね、これから香介君に頼みごとをする上で知っておいてもらわなきゃならなかったからなの」

ちょっと待て、話が飛躍しすぎじゃないか？用件すら教えてもらってないのにそれはないだろう！？

「自分勝手なのはわかってるの。でも、頼めるのが香介君しかいな

くて」

そんな信頼はいらないのだが、だからといってこのまま、はいさよならってわけにもいかない。

目の前の奈菜の様子は真剣そのものであり、何よりも奈菜は親友だ。

「頼みを聞く聞かないは別にして、とりあえず頼みごとってのを教えてくれ。話はそれからだ」

お人好しにもほどがあるよな。だが、ま、仕方ないか。当初の目論見とはまったく違う展開になったけどさ、聞くだけ聞いてみようじゃないか。

第２５話

～第２５話～

生まれてはじめてきるスーツ。とりあえず感想はきつい、早く脱ぎたい。

「やっぱり了承するんじゃなかったかな……」

過ぎてしまった時間が戻ってこないのは自然の摂理であり、覆しようのない事実ではあるが、どうしようもないことを願ってしまうのもまた、人間の本能でありまして。

「本当にうまくいくのかよ……」

高級感漂うホテルのロビーで奈菜を待つ俺。いっとくがやましいことは何もないからな。

なぜこのような不釣合いな場所にいるかというと、奈菜の衝撃の告白まで時間を遡らねばなるまい。

いつになく真剣な様子の奈菜をむげにできるわけもなく、とりあえず話をきくことにしたのだが、

「もう一度言ってくれるか？」
「だから、私の婚約者になって欲しいの！！」
婚約者……、それは結婚の約束を交わした男女のことを指す……。
って、あほか！！
「お願い！！香介君にしか頼めないの！！」
「そんなことお願いされても困るって！！婚約なんて……」
「そこをなんとか！！」
このときは忘れていたのだが、現在俺達がいる場所は喫茶店の中であり、他のお客さんもまわりにはたくさんいるということだ。
そんな中で上のように騒いだらどうなるか？答えは簡単だ、全ての視線がこちらに集まる。
俺達さらし者！！
「とりあえず落ち着け！！そして詳しい事情を話せ！！」
自分が一番落ち着いていないのはこの際置いておくとしよう。というかいきなりプロポーズまがいなことをされて、冷静にいられるやつがいるなら手を挙げろ！！かわってやるから。
「……というわけなの」
物事にはなんにでも理由というものがある。それは今回のお話にも例外なく適用されるわけであり、

「つまり、奈菜のおじさんがお見合い話を持ちかけてきて、断りきれなかったから俺に婚約者のふりをして縁談を破棄してくれと」

「うん……」

いったいどこの昼ドラだ。

こんな話普段なら即刻切り捨てるところだが、今回は相手が奈菜だ。俺とて冷酷な人間なわけじゃない。

親しい相手が困っているのを、はいそうですかと見捨てるわけにもいかない。

「しかしよりにもよって婚約者とは……」

ことがことだ。そう簡単に引き受けるわけにもいかない。奈菜にとってはいやな縁談であってもおじさんもそうだとは限らない。

しかもうまくいったとしても、奈菜の父親には俺たちが恋人関係であるという嘘の事実を認識されるわけで。

「とりあえず会ってみるわけにはいかないのか？」

「絶対無理！！そんなことしたらお父さんのことだもん、すぐにでも結婚とか言い出しかねないもん！！」

会う前から奈菜の父親に対する印象を落としてくれる一言を平気で言うなよ娘。

「それに……」

「ん？」

「そんなことになったら、せっかくのバンドもできなくなっちゃう……。やっとメンバーも集まったのに」

やれやれ。どうやら俺の負けみたいだな。

「わかった、引き受けるよ」

「ほんとに！？」

「ただし、失敗しても俺は責任もたないからな」

お決まりのセリフを吐く自分に思わず苦笑してしまう。

目の前でほっとした表情をしながら飲み物を飲む奈菜を見ながら、今後の不安を打ち消そうとおれも飲み物を一気に飲み干した。

むせただけだったが……

はい、回想終了。できれば回想の世界にずっといたい……

「ほら、ネクタイ曲がってるよ」

「あ～、気にするほどでもないだろう」

「だめだよ！身だしなみはきちんとしなくちゃ！！」

了承するや否や、奈菜は俺を今いるホテルにつれてくると問答無用

でスーツに着替えさせ、自分も淡いピンクのドレスに着替えた。
しかもいつもはしていない化粧までしていて、それを見たときに思わず赤面してしまったのは内緒だ。
というか墓場まで持っていきたい。

「もうすぐお父さんが来るから、打ち合わせ通りにお願いね」

「最善を尽くすよ……」

逃げ出したい気持ちを必死に抑えながら答えてみる。
ここに連れてこられたのは、つまるところお見合いがこれからあるため。いくらなんでも急すぎるだろう奈菜……。

後悔先に立たず。すべては後の祭り。

先人はかくも立派な言葉を残したものだと、このときほど感じたことはなかった。

第２６話

～第２６話～

最近のホテルには、最上階に近いフロアに展望を兼ねた喫茶店やレストランをつくるところが多い。
俺自身テレビなんかでそういうのを見たことはあるし、一度は行ってみたいと思っていたが、まさかこんなに早く、しかもこんなシチュエーションで来ることになろうとは……

「つまりこういうことか奈菜。今お前は水野君と付き合っているから、今回のお見合いはやめてくれと」

「さっきから何度もそう言ってるでしょ。そろそろわかってよ」

「うぅむ……」

あれからほどなくして奈菜の父親はすぐにあらわれた。どんな人かといろいろと想像していたが、なんというかいかにもお父さんといった人だ。
男の一人暮らしだからか、着ているスーツは少しくたびれているし、Ｙシャツもどこかよれよれしい。
だがその顔はどこか優しげで、第一印象としては好印象を持てる人だった。

「だがなぁ……、先方は結構乗り気でな？」

「私は乗り気じゃないの！」

「しかしなぁ……」

先ほどから二人のやり取りは堂々巡りで、俺はと言えば、最初自己紹介をした時以来ずっと蚊帳の外だ。

なんか着た意味がない気がしなくもないが、それは考えないでおこう。

しかし、どうやら奈菜から聞いていた事情とは少し何かが違うようだ。

奈菜から聞いた印象では、父親が無理やりといった感じだったが、どうやら当の地と親のほうもあまり乗り気ではない気がする。

しきりに相手方を引き合いに出すことからみても、おそらくは誰かから無理やり持ちかけられたお見合いなのではないだろうか？

やむにやまれず了承したといったところか。いやはや、大人の世界も大変だなぁ……。

「お父さんは私が嫌がってることして楽しいの！？」

「そういうわけじゃないんだが……」

「じゃあどういうわけなの！！」

それからもうひとつ気づいたこと。奈菜は普段は温厚というか無邪気な性格であり、誰とでもすぐ打ち解けられるような性格であり、実際俺自身ずっとそういう印象しかもってなかったわけだが、

「私は絶対いやなの！！」

どうやら父親に対してはだいぶ態度が違うらしい。もちろん感情が高ぶってるということもあるだろうが、それにしても態度がきつい。なんだか奈菜の父親が小さく見えるのは気のせいじゃないんだろうなぁ。

「水野君だったかな？」

「へ？あ、はい」

いきなり話を振られたものだから、思わず間抜けな声が出てしまう。

「少し二人で話がしたいんだが」

「ふ、二人でですか！？」

「ちょっと、お父さん！？」

待った待ったまった！！そんなことにでもなってみろ、一発で俺と奈菜が付き合ってるのが嘘だってばれちまうぞ！？

「何で私がいたらだめなの！？私のことでしょ！！」

「少しだけ水野君と話がしてみたいんだ」

短くもはっきりした口調。奈菜にしてみてもそれが意外だったのか、言葉に詰まる。

どうやら覚悟しなきゃだめみたいだな……。やれやれ、なんだって一番無関係な俺がこんな苦労しなきゃいけないんだか。

そうも思ってみるけども引き受けたのはあくまで自分であり、この状況になっているのも全部とは言わないが、半分以上は俺の責任でもある。

「わかりました。少しでいいのなら」

「こ、香介君！？」

「大丈夫だ、心配ない」

いろんな意味を込めての心配ないという言葉。言った本人は心配だらけだけどな……

「それじゃぁ奈菜、少し席をはずしてくれ」

納得できないといった表情ではあったが、しぶしぶと、本当にしぶしぶと席を立った。

「本当に少しだからね！ずぐ戻ってくるからね！！」

しっかりとそう言い放って店から出ていくあたり、さすがといったところか。なんにしても二人きりになってしまったわけで、もう後戻りはできない。

さて、どうやってごまかすか……

奈菜の父親を目の前に、脳内で会議が開かれるのだった。

第27話

～第27話～

言い訳や嘘をつくことは自慢じゃないが得意なほうだ。小さい頃からなんだかんだで世渡りのうまかった俺は、気付けばそういったことが人よりもうまくなっていた。

「今日は悪かったね」

「いえ、お気になさらないでください」

だから今回も最悪の事態にはならない自信があった。この場合の最悪の事態とは、俺と奈菜の嘘がばれることである。疑惑をもたれたとしても、とりあえずはこの場を乗り切ることが先決だ。

そのワードを胸に、奈菜の父親の言葉に丁寧に、そしてなるべく柔らかい表情で答える。

「今回の縁談は仕事の上司からの頼みでね、どうしても断りきれなかったんだ」

案の定というか、見事に予想通りの答え。まぁ、見るからにお人よしのような顔をいしているし、頼みごとの類はきっと断るのが苦手なのだろう。

「私としても奈菜の望まないことをしたくはないのだが……」

今の一言で、この人がどれほど奈菜を大切にしているかがよくわかった。言葉の内容だけではない。その口調、そして表情。うまく説明はできないが、これほど大切にしてもらっている奈菜は、とても果報者であると思わず思ってしまう。

「それはどうやっても断れないんですか？」

「一度引き受けてしまった手前、そう簡単にはいかないな」

それはそうだろう。簡単にいくならそうしているだろうし、そもそも奈菜が俺を代役に立てるくらいなのだ、親子での話し合いの場でひと悶着くらいあったに違いない。

「まったく、本当に私はだめな父親だよ」

絶え間なく思考を展開させていると、ふとおじさんがそう漏らす。その声のトーンに思わず思考を中断する。

「離婚の原因もすべてとはいかないが、ほとんどは私のようなものだ。そのせいで奈菜には計り知れない迷惑をかけることになってしまっている」

それは愚痴といえばおれまでだが、おじさんの心の叫びのようにも聞こえた。

「高校生活といえば青春まっただ中、一番楽しい時で遊びもしたいだろう。それなのに私のせいで奈菜は家事に縛られてろくに遊べて

もいない」

確かにそうかもしれない。いきさつは違うとはいえ俺も母子家庭で育っている以上、家事という仕事は一日のスケジュールの中で大きな部分を占める。

事実、それで友達からの誘いを断ることになったのも一度や二度ではない。

「一人暮らしとは言え、すでにその前の習慣なのか家事に対して手を抜こうとしないんだあの子は。もっと自分の時間を大切にすればいいのに」

そういえば奈菜は時間にうるさかった気がする。なるほど、今の話を聞けばそれも納得できるというものだ。やれやれ、真面目すぎるのも困ったもんだな。

「そこまで思っているのなら、もう少し上司と話し合う余地があったんじゃないんですか？」

自分でも立ち入った質問だとは思う。普段の俺ならこんなことは絶対言わないはずだが、おじさんの一言一言にどうしてもそう聞かずにはいられなかった。

「断りきれなかったにしても、せめて本人の希望を聞くまでは決定を先延ばしにするくらいできたように思うんですが」

「それはわかっている。わかっているができなかった」

「なぜです？」

今度こそ立ち入りすぎたと思った。一瞬だったが、確かにおじさんの顔が曇ったのを俺は見逃さなかった。

「チャンスだったんだよ」

「チャンス？」

「よくある話だ。縁談の結果次第では私の昇進に大きくかかわる」

苦々しげに言葉を吐く。

「別に私は出世などに興味はない。だが、少しでも出世できれば奈菜に報いることができるのではないか、そう考えてしまったんだ」

「そんなことをすれば逆に奈菜の幸せを奪ってしまうというのに……。まったく、本末転倒もいいところだ。こんなだから妻にも愛想を尽かされてしまうんだ」

自嘲気味に笑う。

なんとも皮肉な話だ。わが子の幸せを願っているのにうまくいかない。冷静に考えれば結果は見えているのに、奈菜のことを思うあまりそれすらもわからない。

理不尽ってこういうを言うんだろうな。

「すまないね、愚痴を利かせるようなことをしてしまって」

「いや、貴重な話でした」

婚約者の真似ごとをしている以上、少しでも実情を知っておく必要がある。

「話を戻そうか」

「はい」

「単刀直入に言わせてもらう。私たちに協力してほしい」

「協力といいますと？」

「奈菜にも言われいるとは思うが、今度の縁談の席で婚約者のふりをしてくれ」

このときほど、俺は親というものの偉大さを感じたことはなかった。結局、奈菜のやろうとしていることなどお見通しだったのだ。

第２８話

～第２８話～

昨日までの天気はどこへやら、俺の心象模様をあらわすかのように空には薄い雲が目立ち始めてきていた。
天気予報によれば今日のうちに雨が降るようなことはなさそうだが、高度の低いところにあるその雲とあたりの薄暗さをみていると、その予報もなんだか疑わしくなってくるというものだ。

「ははぁ、水野さんもたいへんですねぇ」

「思いっきり人事だな……」

「そりゃあ、ひと事ですから♪」

その小さい弁当箱の中からウインナーをひとつとって口の中に放り込む百合。今日も今日とてどういうわけか俺は百合と一緒に昼食をとっている。
というかただ単に百合が昼飯とともに俺を引っ張ってきたというのが真相なのだが、言っても無駄のようなので何も言わないでおく。

「でもお見合いをつぶすっていうのは、簡単に言いますけど相当難しいのでは？」

「そんなのわかってるから気が重いんだろう……」

正直関係のない奴に話すべきではないと思ったが、百合と奈菜はどうにもうまが合うらしく、まだ知り合って間もないが仲はかなりいい。
それに同じバンドのメンバーでもある。何よりおれ自身が誰かに話さなければやってられなかったというのが一番の要因化もしれない。
なんとなく百合は信用できるようなきもした。根拠は何もないけど。
「まぁまぁ、私もできる限りの協力はしますから、そう重い空気を押し出さないでくださいよ」
「無茶言うな……。下手すりゃ俺の行動で奈菜の人生が決まるかもしれないんだぞ？お気楽ムードなんかできるかよ」
「確かにそんなムード出してたら問題ありですね～」
「やっぱり人事だな……」
片や弁当を美味しそうに咀嚼する女生徒と、片や異常に重い空気に包まれた男子生徒。そんな奇妙な組み合わせの昼食はあっという間に過ぎていくのだった。

放課後はいつものように創立祭に向けての練習。創立祭は土曜、日曜の二日間行われ、一日目は関係者のみの公開で二日目が一般の人への公開日だ。
俺たちの演奏するのは2日目の夕方、後夜祭での発表となっている。

後夜祭といえば一番の盛り上がりを見せる場でもあり、そんな中での演奏となれば失敗は許されないのだが、

「これはまずいですね……」

百合がそう漏らすのも無理はないというものだろう。3人のうちの2人が練習に集中できていないのだ。
俺はもとからあまり合っていなかったが、土曜日まではばっちりだった奈菜までもが調子が悪いときている。
その理由は言わずもがななのだが、

「なんとかしてください水野さん」

「そこで俺にふるのかよ」

「当然です。ここで奈菜さんにふったら、私空気読めてない子じゃないですか」

だからと言って俺にふるのもどうかと思うが、確かに今の奈菜の様子はよろしくない。一応ギターは持っているが、視線は定まらずどこか遠くを見ているようで、最初のほうこそ声をかければ返事をしていたが、今では返事のひとつも返ってこない。そればかりか奈菜の一番の特徴ともいえる笑顔がないのだ。

「やっぱり原因はあれですよね」

「それ以外にも何かあるなら、俺にはもうお手上げだぞ」

「ん～、これは非常に困りましたね～」

奈菜にとっては自分の人生の分岐点に立っているのだ。しかも強制的に。そんな状態で集中しろというほうが酷なのだが、だからと言って練習をしにわけにもいかない。

「奈菜、大丈夫か？」

「……」

「奈菜？」

「え……？あ、何？」

どこかに飛んでいた意識がようやく戻ってきたらしい。自分が今何をしているのかを確認するかのようにしきりにあたりを見回している。

これはもう無理だな……

百合に視線を飛ばすと小さな頷きが返ってくる。どうやら理解してくれたらしい。

「今日は練習は終わりにするぞ」

「え？だめだよそんなの！本番まで時間ないのに！！」

そんなものはわかっているが、この状況で練習をすることはなんの意味もない。だがそれをそのまま伝えるのは駄目だ。

「昨日のことでな、なんだか今日は集中できなさそうなんだ。二人には悪いと思うんだけどさ」

「あ……」

我ながらいい言い訳だと思う。奈菜ほどではないにしても俺だって不安はあるのだ。何か言いたそうにしていた奈菜だったが、結局は何も言わずに練習を終わることに同意してくれた。

その日の練習は早めのお開きとなった。

第２９話

～第２９話～

ファーストフード店のポテトというのは、実は店の売り上げの大部分をたたき出しているらしい。もちろん他の商品も原価より高めに売ってはいるが、ポテトのそれとは比較にならないというのをどこかで聞いたことがある。それでもついつい頼んでしまうのは、ひとえに店側の商売のうまさなのか、それとも純粋にポテトがおいしのか、暇つぶしに議論してみる価値はあるのではないかと思う今日この頃。

「暇があればの話なんですけどね～」

「人に無理やりポテトをおごらせてるやつのセリフじゃないよな」

「人生気にしたら負けってよく言いますよね～」

言うが早いかなぜか俺のポテトにまで手を伸ばしてくる百合。阻止しようと試みてもみたが、右から左からの攻撃、というかあまりのしつこさにすでに諦めた。

そんなに好きかポテト……

「でもどうするんですか？」

「どうすると言われてもな、正直さっぱり思いつかないんだが……」

「デリケートな問題ですからね、失敗は許されませんし」

人の不安をより一層あおってくるな。なんのために相談しているのかわからんだろうが。

「とりあえずお見合い相手の情報などはないんですか？」

「ああ、それなら奈菜の父親から聞いてある」

かばんの中から大きめの封筒を取り出す。ただ聞くだけじゃあれだからと、紙面にまとめたものだ。こんなものを用意してあるあたり、いったいあの人はどんだけ用意周到なのかと考えてしまうのだが、それは言わぬが花というものだろう。

まったく、これだけの準備をするくらいなら最初から断ってしまえばいいものを……

今回奈菜のお見合いの相手になるのは、どうにも奈菜の父親の会社の一番の取引相手の社長の息子らしい。いわゆるボンボンというやつで、資料のひとつである顔写真からもその様子がうかがえる。しっかりと櫛を入れ、整えられた髪にいかにも真面目そうな表情。ファインダーを見ていたのであろうその眼からは、写真越しだというのに大いなる自身が感じられる。

もちろんプロフィールもたいしたもので、中学、高校、大学と学歴を見てもいずれもどこかで聞いたことのあるような名前のものばかり。現在は父親の下で働いているらしいが、社内での評判も非常によく、時期社長就任に大きな期待がよせられているとかいないとか。

「何と言いますか、水野さんの勝ち目ゼロじゃないですか？」

「そんなもん、自分が一番よくわかってる」

「でもこれを見る限り、今回のミッションは相当に難易度が高そうですね～」

まったくその通りだ。お見合いをつぶすなんて簡単に言うが、こんなプロフィールの持ち主と一般ピープルである俺がどう戦えというのか？

「ただつぶしただけでは奈菜さんのお父様に責任がなすりつけられそうですし」

はっきりいって、そこが一番の問題なのだ。潰すだけでいいなら話は早いのだ。お見合いの席で相手が奈菜に見向きもしなくなるように仕向けるだけでいい。最悪その方向にいく可能性は大いに高いのだが、――実際、奈菜の父親にも最悪そうしてくれと言われている――、だがそれでは、お見合い失敗の責任は百合の言う通り奈菜の父親に回ってくるだろう。大人の世界なんてそんなもんだ。

「大前提としてはお見合いを潰すことですが、相手に納得してもらえる形にもっていくというのが理想ですね」

「その理想が異常に高いな……」

「ほら、ハードルが高いほどそれを乗り越えたときの達成感も大きいと言いますし♪」

「ことごとく人ごとだよな……」

本当に無理難題を引き受けちまったもんだ。ただでさえ創立祭のことで手いっぱいだというのに。

「今日のところはもういい時間ですし、解散しませんか？」

「お前ポテト食べただけじゃないか？」

「それはそれということで♪」

結局何もいいアイデアもでずに対策会議はお開きとなるのだった。今日の出費、英世が一枚……。

薄暗い公園通りを一人歩く。もとから人通りが少ないのか、それともこの時間帯には出歩かないのか、とにかく通りに私以外は誰もいない。最近引っ越してきたばかりではあるが、このあたり一帯の地理はすでに頭に叩き込んである。

「さみしい場所ですね……」

日が落ちた後の風は冷たくもともと白い肌がさらに白く見える。その風に髪がなびく。

「水野さん悩んでましたね～」

それはもうこの世の終わりとばかりに悩んでいた。まぁ、普通あんなことを頼まれてああならないほうが珍しいだろう。それでも私は心配することはない。

「水野さんが望むのであれば、叶わないことはないのですから……」

通りを歩くその後姿には、なぜか寂しさのようなものを感じられた。

第３０話

～第３０話～

翌日も状況は何もかわりはしなかった。朝練の間、奈菜はずっとぼーっとしていたし、俺と百合はそれを気にかけるばかりでまともな練習など少しもできはしなかった。無論、俺だってそんなに簡単に自体が好転するなど思ってはいないが、今朝音楽室の扉を開ければ、いつものように快活に笑う奈菜の笑顔が見れるのではないかという淡い期待がなかったと言えばうそになる。

「水野さ～ん」

「うるさい」

「わ、その反応は少し冷たいんじゃないですか？」

傷つきます、とかなんとか横で百合がわめいているがもちろんスルーだ。構ってもいいことないのは明白だし、百合がそれを少しでも場をなごませるためにやっていることは俺にもわかる。わかるがだ、

「ひどいです！私とは遊びだったんですね！！」

正直うっとおしい。まったく、こいつは人にゆっくり考え事をさせたくないのだろうか。しつこく百合が何かをわめいているがさらにスルー。だが、これだけうるさくしている（主に百合が）のにもかかわらず、奈菜はこちらに関心をしめさないどころか見向きもしない。結局、昨日の放課後に続いて今朝も貴重な練習時間を浪費して

いくのだった。

授業中も考えるのは奈菜のことばかり。なんだかこれだけを聞けば一見恋する少年に聞こえるが、もしそうだったらどれだけよかったことか。

――コツン

「……ん？」

机の上に転がる丸められたルーズリーフ。どうやら俺の頭に当たったらしい。周囲を見渡してみると、七倉と歩がなにやら意味深な視線を送っている。どうやらこれの差出人はあの二人らしい。

『昼休みに屋上に来い』

ルーズリーフにはそれだけ書かれていた。意味をはかりかねて、もう一度視線を飛ばすが二人はすでに授業に意識を戻しているのかもうこちらを見てはいない。

仕方がない。

昼休みも貴重な時間のひとつであり、役に立つかどうかは別として百合と今後の方針を話しておきたかったのだが……

そうは思ったが、少し気がめいっていたのも事実。たまには悪友と一緒に昼飯でも食って気分を紛らわせるのも悪くはない。そう考えると、不思議と気持ちが少しだけ軽くなったような気がした。

昼休みの喧騒にまぎれて校舎を移動する。今日も水野さんと昼食をとろうかと思ったが、すでにどこかに行ってしまった様子。べつに約束をしていたわけでもないのでいなくてもさしてかまわないのではあるが、一人でいると妙に男子生徒からの視線が気になる。

どこかいい場所はありませんかね？

水野さんのお気に入りの場所に行ってもいいのだが、なんとなくそういう気にもなれなかった。あそこは水野さんの場所であり、決して私の場所ではない。本人がいないのにそこに行くのは少しためらわれた。

校舎を出て場所を探す。できれば人がいない場所がいい。中庭では生徒が何人かおしゃべりをしながら昼食をとっている。空を見上げれば気持ちのいい青空。こんな日に外で食べるのはさぞかし気持ちいことだろう。

校舎を離れ、学校の敷地の中を歩く。中庭を通り抜け、テニスコートを横目に校内の散策を続ける。そこでふと目にとまった横道。意識していなければおそらく気づかないであろう細い道。だが、そこは確かに道であった。木々の間にできたその道はその部分だけは土が露出して踏み固められている。雑草が生えてはいるがたしかにそこだけは異質であった。

道はそれほどは長くはなく、一分も歩けば開けた場所に出た。

「これは……、少し驚きですね……」

眼前に広がるのは一面の桜。これが先ほどまでの校内の風景のだろうか？それほどまでにここの風景はそれまでのものと違っていた。

「情報には聞いていましたが予想以上です……」

ここが例の場所ですか。

いつぞやの香介と同じく、百合もまたその風景にみとれていたのだった。

第３１話

～第３１話～

屋上というのは実にいい。校内にいるのに外にいるという不思議な感覚。開放的になれる空間。なんともいい場所である。しかし、そんないい場所でありながら、今ここにいるのは俺と七倉に歩の３人だけ。昼休みの屋上なんて人であふれていそうだが、最近の学校では屋上というものは基本的に立ち入り禁止であり、施錠されているのが大半なのだ。ならなぜ俺たちはその屋上で昼食をとっているのか？その質問はやぼというものだ。高校生というものは、時に無茶をしたくなる年ごろなのさ。だから俺は扉に付けられていた南京錠が壊されて、いつの間にか七倉の買ってきた南京錠に付け替えられていて、あまつさえそのカギを持っているのは俺たち３人だけなどということは全く知らない。知らないと言ったら知らない。

――あぁ、今日もいい天気だ。

「で？何があったんだ？」

会話の開始は歩のいきなりの質問から始まった。前ふりも何もあったもんじゃないな。それでも通じてしまう自分が少しだけいやになる。男と以心伝心っていうのもなんだかな。

「藪から棒になんだいきなり？」

なのでとりあえずそんな返答をしておく。購買で買ってきたパンを口の中に放り込む。今日のカレーパンははずれだな、カレーの量が

少ない。

「だ～か～ら～、昨日今日と明らかに様子がおかしいからわざわざ屋上で話を聞いてやってるんだろう？感謝しろよ」

どこにどう感謝していいのかイマイチわからないが、とりあえず俺がここに呼び出された理由はわかった。つまるところ、自分ではそんなつもりはなかったが、奈菜のことで少しばかり俺の様子がおかしかった。だから授業中にルーズリーフに呼び出しを書きなぐって俺の頭にぶつけてみたと。

「何すんだこの野郎」

「いや、いきなり意味わからねぇし」

まぁ、こいつなりに気を使っているんだろう。根はいい奴なのはよく知っている。なんというか情に厚いんだこいつは。もう一人のほうは知らんが……

「なんだ水野、そんな熱い視線を送るな。照れるじゃないか」

「そうだな。もうお前はそこから飛び降りていいぞ」

「遠慮しておこう。まだまだこの世に未練があるのでな。それを消化しないうちは死んでも死にきれんさ」

七倉はそういうと、缶コーヒーを一気に飲み干す。その姿がどこか様になっているのが気に入らない。

「それで何があったんだ水野よ？」

「そうだ、せっかく俺たちが時間をとってやってるんだからさっさと話せよ」

だから頼んだ覚えはない。そんなことは口には出さないけどな。実際、思ってもいないし。正直言えば嬉しくもある。自分の変化に気付いてくれて、尚且つその相談に乗ってくれようとしているんだ。嬉しくないはずはない。もっともそれをつたえるかどうかはまったくの別問題ではあるが。

「何かといってもなぁ」

「校内で何か起こったということは俺の情報網にはかかっていない。ということはこの週末に水野の周辺で何かあったということだ。まぁ、この地域の情報もそこそこは入っては来るが、お前の様子にかかわることは何もなかったがな」

真剣に七倉という存在がわからなくなる言葉なので、そのままスルーしておくことにする。しかし今俺が抱えている問題を二人に話していいものか？あくまで今回のことは奈菜の家庭、つまり朝倉家の問題であり、俺がそこに絡んでいるのはたまたまである。百合に話したのは不可抗力ということにしておこう。百合は奈菜と友人、いや、付き合いは短いが親友みたいなものだし。

「何か話しづらいのか？」

「あ～、俺にもかかわっていると言えばそうなんだけどさ、大元が俺じゃないからな」

「つまりその大元とやらに確認もとらずに話してしまうのは気が引

けるということか」

「まぁそういうことだな」

奈菜のことだから怒らないとは思うが、――もっとも今はそれどころではないだろうが――自分の家庭の事情を聞かれるのは嫌かもしれない。というか嫌だと思う。

「そんなわけで気持ちだけありがたく受け取っておくことにする」

「なんだよ～、俺たち仲間はずれかよ香介～」

「お前は少し空気を読め」

「まったくだな九条よ。なんなら俺が空気の読み方を伝授してやってもいいぞ？」

「そのおまけに変な能力に開花しそうだから遠慮しとくぜ」

その言葉に3人で笑う。それはもう馬鹿みたいに声を上げて。その時間はとても楽しいもので、やっぱりこの二人は悪友であり親友だと改めて感じる。沈んでいた気持ちもだいぶ浮上してきた。

ここからだな。

今一番つらい立場にいるのは他でもない奈菜なのだ。今頃一人でかどうかはわからないが、少なくとも笑うこともなく昼休みを過ごしているのだろう。それをどうにかしてやれるのは誰だ？今のところ俺しかいないだろう。なら、やってやろうじゃないか。今俺がこうして笑っているように、奈菜にも笑顔をとり戻してやろうと、おも

う素直に思えた。

けれどその前に、今はまだ、せめて午後の授業の予鈴までは、このバカみたいな時間を過ごすことに専念しようと思う。

第３２話

～第３２話～

さて、戦いというものはとにもかくにも情報だ。敵を知れば百戦危うからず、確かこんなことわざのようなものがあった気がする。正確に覚えてないのは授業をちゃんと聞いてないからだ。そこらへんは悟ってくれ。

というわけで現在、俺はそれを実行に移すことにしてみたのだが、少しばかり自分の計画性のなさにあきれてみたりもした。目の前にそびえるは馬鹿みたいに高いビル。高層ビル群の仲にありながらこのビルは、それでも目立っていた。後で聞いた話によれば、どうやらビルの最上階は展望スペースとなっていて利用者はそこそこ多らしい。

「場違いって、こういうことを言うんだろうな」

小さくつぶやきながらビルの入り口に歩を進める。俺は学校帰りということもあり制服のままなので、スーツ姿の人が多いこの場所ではかなり目立つ。というかさっきから注目の的になっている気がしてならない。

入り口にの横に立っている警備員の視線がさっきから俺に固定されているのも、決して気のせいではないだろう。

衆人環視、っていうのはちょっと言いすぎだが、似たような状況は入り口の自動ドアをくぐった後も続いた。いや、悪化したと言ってもいいくらいだ。右から左からくる視線、視線、視線。

判断ミスったかもしんない……

なんだか胃が痛くなってきた気がする。そうはいってもここまで来たのに、後戻りなどできるはずもない。俺は自分で決めてここに来たのだから。

「すみません。神崎専務に会いたいのですが」

「神崎専務ですね、少々お待ちください」

受付の女性は俺のことをあからさまにいぶかしんでいたが、それでも仕事ということで割り切ったのか、どこかへ連絡を取っている。その間ももちろん周囲からの好奇の視線は絶えることがない。確認が取れるまでの時間はそんなにかかってはいないのだろう。だけど、そのときの俺にはそれが何１０分に何時間にも感じられた。

「申し訳ありません。御約束のほうがないようですので、神崎専務に御取次するわけには……」

だろうな。どこの学生かもわからないガキがいきなり現れて、あまつさえその会社の幹部に会いたいと言ってすんなり合わせる会社がどこにある？もちろんそれを予想して何も考えてこなかったわけではない。ちゃんと次に言うべき言葉は用意してある。

「朝倉奈菜について話があると言ってください。きっと通ると思いますから」

受付の女性はその言葉に困惑しているようだったが、とりあえず事情を伝えるためにまた受話器を取る。

まったく、俺自ら敵陣に乗り込んできてるんだからちゃんとあってくれないと困るんだけどなぁ。

なんて、心の中で冗談を言ってみたりもするが、さっきからそのリズムを早くし始めた心臓は一向に収まる気配を見せない。

やれやれ、俺も小心者だな。

それも仕方ないか。なにせこれから会おうとしているのは奈菜のお見合い相手なのだから。

通されたのは応接室と思わしき部屋だった。部屋の中央に向かい合わせに置かれた革張りの黒いソファ。その間にはきれいに磨かれているガラスのテーブル。これぞ応接室と言わんばかりの部屋だった。

「神崎専務は間もなくいらっしゃいますので、しばらくお待ちください」

俺をここまで連れてきてくれた女性はお茶をテーブルの上に置くと、そう言って部屋を出て行った。

さてと。

とりあえずソファに腰掛け、出されたお茶を飲み一服。しかし我ながらうまくいったものだ。あの後の俺への対応はそれはもう迅速だった。受付の女性の態度は一転、今までいぶかしんでいた表情は作

り笑いではあるが、それでも完璧な営業スマイルへと変化し、まるで総理大臣を相手にしているかのように俺をこの部屋まで案内してくれた。
電話口でどのようなやりとりがなされたのかは知らないが、少なくとも彼女の今後を左右するだけのことは言われたんじゃないだろうか。

お茶をもう一口飲み干す。待ち人は未だに現れる様子はない。ちょうどいい、もう一回資料に目を通しておくのもいいかもしれない。
かばんの中から昨日、百合に見せた資料の入った封筒を取り出す。
その中の一番上に入っている紙に張られた一枚の写真。

『神崎佑介』

奈菜のお見合いの相手であり、今日俺が愛に来た人物。写真の中のその顔は最後に見た時同様に、やはり大いなる自信に満ちた目で俺を見つめ返していた。その表情をみるだけでも軽い威圧感を覚えるというのに、これからその本人と会ってしっかり話ができるのだろうか？
思わずそんな風に弱気になってしまう。

ガチャリ――

突然開かれる扉。持っていた資料を急いでかばんの中へと突っ込む。
無理に入れたせいでぐしゃりという嫌な音が聞こえた気がしたが、聞かなかったことにする。

「すみません。お待たせしました」

部屋に入ってきた男は写真の中の姿そのままだった。その表情はも

ちろんのこと、しわひとつないそのスーツまでも写真と同じだったのは何かの偶然なのだろうか？

「いえ、こちらこそいきなり押しかけてすみません」

「気にしなくていいよ。だけど、まさか僕への客が学生だとは思わなかったけどね」

清々しいくらいにさわやかな態度。第一声はビジネス用の話し方だったが、自分への客が学生ということがわかると、次にはすぐに口調が変わる。

だけどそれは俺が学生だからといって、軽く見えているのではなく、あくまで対等に会話をしようとしているように感じられた。

「今まで会議があってね、すぐに来たっかったんだけど僕が席をはずすわけにもいかなくて」

神崎は俺の向かいに腰掛ける。そのタイミングを見計らうかのように歳ほどの女性がお茶を持って現れる。

「ああ、ありがとう」

神崎の前にお茶を置くと、彼女は一礼して部屋を出ていく。部屋の中には少しばかりの沈黙が漂う。

「さてと、僕に用があるみたいだけど？」

沈黙を破ったのは神崎のほうだった。奈菜のことで来たというのはすでに聞いているはずだが、あえてそういう言い回しをするあたり、俺からしっかり話を聞きたいということだろう。

まったく、もう少し嫌な奴ならよかったのにな。

「すでに聞いていると思いますが、今日神崎さんに会いに来たのは朝倉奈菜のことについてです」

これから話すべきことはすでに何度もシュミレーションしてある。

さぁ、腹の探り合いのはじまりだ。

第３３話

～第３３話～

「奈菜さんのことで話があると聞いたけど？」

俺の前に座った神崎は、開口一番そう口にする。その口調は穏やかで、しかしだからと言って俺をどうでもいいものとして扱っているわけでもない。

第一印象としては非常にいい感じの人柄。さすがは２０代で会社の重要なスポットを任され、尚且つ社員からの好感も高いわけだ。

「奈菜本人から、今週末に正式にあなたとお見合いをすると聞いたのですが」

「そのことか。うん、それは本当のことだよ。正直楽しみでね、早く奈菜さんと話せるのが楽しみなんだよ」

なんとも予想外の返答。というかなんだそのきらきらと輝いた目は。

「彼女を見たのは本当に偶然でね、ちょうど先方の会社に行った時に見かけたんだ。なんでもお父さんのお弁当を届けにきたとか。いい子だよね～」

しかも勝手に話し始めた。しかも口調変わってきてないか？もはや友達に話しているような感じになってきているのだが。

「あれが一目ぼれって言うんだろうね。柄にもなく舞いがってしま

ってね。まさかあんなに……」

「あんなに？」

「いや、すまないね。少しばかり話が脱線してしまった」

何かを言いかけたところで、思い出したように会話を打ち切る神崎。口調も最初のそれに戻っている。

「そういえばまだ君の名前も聞いていなかったね」

「水野香介です」

「水野君ね。ここに来たというとは僕のことはすでに知っていると思うけど一応自己紹介しとくよ。僕は神崎佑介。神崎コーポレーションの専務をやっている」

神崎コーポレーション。奈菜の父親から渡された資料によれば、確かコンピューター関連の会社だと書いてあった。仕事の幅は広く、ＰＣ本体の製造開発から、ソフトウェアの開発など現在、日本のコンピューター産業の中枢を担う企業だ。

対して奈菜の父親の会社はその商品の販売や宣伝などを行う、まぁいわゆる傘下的な企業というところだろう。そんなところの専務が自分の子会社のましてや一社員にほれ込むというのだから、なんというかすごいことに思えてくる。もっとも、愛の前にはそんなものは関係ないとか言われたらそれまでなのだが。

「それで、君は奈菜さんとどういう関係なのかな？」

当然の質問だろう。いくら事情を知っているとはいえ、俺と奈菜は

あくまで他人同士。人様の家の事情に首を突っ込むような関係にはみえないだろう。

「おそらくは恋人といったところかな？」

「鋭い洞察力ですね」

「いやいや、それ以外に君のような学生が僕に会いに来る理由はないだろうからね」

そりゃそうだ。まぁ、よっぽどのお人よしならば友達のピンチだとかなんだがで来ないこともないだろうがな。出されたお茶でのどを潤す。なかなかいいお茶っぱを使っているようだ。あれ？それじゃあ、偽の恋人になっている俺はよっぽどのお人よしか？

「それで、奈菜さんの恋人である君が僕に何の用なのかな？」

そんなことわかってるだろうにな。このときはじめて神崎の顔に嫌なものを見た。何かを企んでいるような、いや、そんなものではない。この表情は策士の顔だ。

本性出してきやがったか。

「簡単な話です。奈菜には現在俺という恋人がいます。ですから縁談を取りやめてください」

「これはまた直球だね」

「あなたに対して変化球はいらないでしょう？お望みならばスライダーでもシンカーでも投げてあげますけど？」

「お気づかいどうも。だけど遠慮しとくよ。僕もそんなに暇じゃないんでね」

神崎が最初に部屋に入ってきたときの和やかな空気は、すでに部屋のどこにもない。お互いがお互いをけん制し、腹の内を探り合う。

「もう一度言いますが、奈菜には僕がいますので」

よくもまぁ、これだけ大っぴらに嘘が言えるものだと自分でも半ば感心する。奈菜は友達、いや、親友レベルの仲だとは思うが、一度もそういった感情を抱いたことはない。にもかかわらず、これだけ恋人だと言い張れるのはなぜだろう？もっとも、今はこの態度のほうが、相手にうそを見抜かれる可能性が減るのだからいいのだけれども。

「恋人か……、別に大した問題じゃないよ」

「何がですか？」

「奈菜さんに、君という恋人がいる居ないは大した問題じゃないと言っているんだよ」

神崎も先ほどの俺と同じようにお茶を飲む。今の言葉はどういうつもりだ。

「確かに今は君が奈菜さんの隣にいる。だけど所詮は高校生の恋愛だ、そう長くは続かないさ。だけど僕には奈菜さんを幸せにする力がある。地位も財力もだ」

神崎はなおも続ける。

「一時的に君との別れは辛いものになるだろうが、それもそのうち思い出に変わる。人は忘却の生き物だからね。そしてその時に気付く、あのとき僕を選んでよかったと」

その言葉を聞いて俺の中に起こった感情は、驚きでも、怒りでもなかった。純粋な呆れ。少しでも理性のタガがはずれれば、すぐにも目の前の相手にとびかかりそうなくらいの呆れ。

言っていることは間違いないだろう。こいつは奈菜に人並みの幸せを送れるだけのものを持っている。だけど納得などいくはずがない。何を持ってこいつに奈菜の未来を決めるだけの権利があるというのか。

「君にとっても決して納得のいくものではないと思う。僕としてもそれなりのことを君にするつもりではいる」

「結局はお金ですか？」

「君がそう望むのであれば」

神崎の目は揺るがない。あの写真で見た通りの自信に満ちた目。その目を見て、俺はますますこいつに奈菜を任せるわけにはいかないと思った。確かに俺は本当は奈菜の恋人でも何でもない。だけど、それでもこいつだけは嫌だった。こんなやつに親友の将来は託せない。

「交渉決裂みたいですね」

「なるほど、それが君の答えか」

ため息をひとつはくと神崎は座っていたソファから身を起こす。

「それじゃあ僕はそろそろ仕事に戻るよ。これでも忙しい身なんでね」

「貴重なお時間をとらせてすみませんでした」

相手がどんな奴であれ礼節はわきまえるべきである。気は進まないがお礼を述べ、一礼を神崎にする。

「さっきも言ったけど気にしなくていいよ。君と話せてよかった。奈菜さんに素晴らしい友人がいると言うことがわかったからね」

それじゃあ、と言い残し神崎は部屋を出る。

友人ね……。

どうやら相手は一枚も二枚も上手のようだ。なにせファーストコンタクトで俺の嘘をこうも簡単に見破ってしまうのだから。

第３４話

～第３４話～

神崎と別れ、ビルから出るころにはもう太陽の半分が沈んでいるところだった。夕日に照らされ朱にそまる道を歩きながら、これからのことを考える。言葉には出さなかったが、すでに相手には俺と奈菜が恋人出ないということはばれてしまった。なんというか、一番の切り札を一気に無効化されてしまったわけである。

「とりあえず、おじさんと連絡をとるか」

神崎との対面がよくない方向で終ってしまった以上、それを奈菜の父親に報告しないわけにはいかない。それにこれからの新たな対策も練らねばならない。ポケットの中の携帯を取り出し電源を入れる。電源は会社の中に入る前に電源は落としておいたのだ。いかなる状況であれ、最低限のマナーは守るべきだ。もちろん例外はあるが、少なくとも自分から会いに来ておいて、その相手の前で形態を鳴らすなんてことはしたくはない。それによって相手からの評価を落としたくないという計算ももちろんあったのだが、それはそれだ。

「ん？」

電源を入れ、とりあえずメールが来ていなかったか問い合わせをしてみたのだが、

―新着メール３２件

「こんなにメールがたまってるのは初めて見たな……」

どこぞのストーカーにでも目をつけられたのかとメールボックスを開く。メールの差出人は全部同じ名前だった。無視しておこうかとも思ったが、なんとなく後が怖いので仕方がないので電話帳からそいつの番号を呼び出しコールする。するとコール音が一回も鳴り終わらないうちに、

『今どこにいるんですか～！！』

こちは人の鼓膜を突き破りたいのだろうか？耳元から３０センチ以上離したというのに、スピーカーからは依然すさまじい大音量の声が響いている。

「少しボリュームを落としてくれ。会話にならないから」

『何を言ってるんですか！？急にいなくなって何を考えてるんです！！』

「俺にもいろいろやることがあるんだよ」

『だったら一言くらい言ってからいなくなってください！！フォローを入れる私の身にもなってっくださいよ！！』

大量のメールを送りつけてもなお、連絡を寄こさなかったことにだいぶご立腹の様子な電話の主、もとい百合は勢いそのままにさらにまくし立てる。

「わかったから少し落ち着けって」

『これが落ち着いていられますか！！今どこにいるんです！？』

「少なくとも学校にいないことは確かだ」

今いるのは神崎コーポレーションから少し離れた高層ビル群。学校から電車で2駅ほど離れたところだったりする。

『それなら昨日のお店にすぐに来てください！いいですか、３０分以内ですからね！！』

そう言うと百合は電話を切ってしまったらしい。スピーカーからはツーツーツーという電子音しか聞こえなくなっていた。というか３０分以内はないだろう。ここからだとどんなに早く戻れたとしても１時間はかかる。

それよりも気になるのは集合場所が昨日百合になぜかポテトをおごらされた店だということだ。またおごらせるつもりではあるまいな。

「仕方ないか」

ともあれ駅に向けて足を進めることにする。おじさんへの報告は後に回すことにした。昔から怒った女ほど怖いものはないっていうからな。

結局、俺が店に着いたのはそれから2時間たってからだった。駅に着いたはいいが、電車は出発したばかり。その上、信号トラブルだかなんだかでさらに遅延したときた。ゆえにこの遅れはおれのせいでは断じてないのだが、目の前の人物はそうは思っていないらしい。その証拠にいつもの笑顔がどことなく引きつっている。

「それで、水野さんは一体どこに行ってたんですかね？私に一言も言わずに午後の情行をエスケープした上に、３０分で来てくださいって言ったのに2時間も遅れるなんて」

「別に俺がどこかに行くのに百合に報告の義務はないだろう？それにさっきも言ったが、遅れたのは電車のトラブルのせいだ」

「そんなの関係ないです！！とにかく水野さんが勝手にどっかいっちゃったせいで、私大変だったんですから！！」

はて、俺が消えて百合が困る？俺が授業をさぼるなんてのは行っちゃ悪いが日常茶飯事だ。それこそ教師の方もすでに黙認しているほどである。教師ですらそうなのだから、周りの生徒が何かをいうはずもない。では百合は何がそんなに困ったのか？

「水野さんが放課後に練習に来なかったせいで奈菜さん、すごく落ち込んでたんですから！！」

なんでも俺が練習に来なかったのは、自分がここ数日まともに練習に集中できていなかったからだと奈菜は思ったらしい。自分が誘ったにも関わらず自分の都合で俺と百合に迷惑をかけたと、余計に思考を悪い方向に持って行ってしまった奈菜。それをなんとかフォローしようと百合は一人で孤軍奮闘したというわけだ。

「水野さんは用事があって私に伝えていたのをすっかり忘れていたということで納得してもらったおは思いますが、おかげで私、この年で健忘症の疑いです！！」

が～、とか叫んでいる百合は放っておくにしても確かにこれは俺の落ち度だ。奈菜のために動いたはずが、結局は奈菜にさらなる追い

打ちをかける形になってしまった。これでは本末転倒もいいところだ。

「予定変更だな」

「何が予定変更なんですか！！というか私の話ちゃんと聞いてるんですか！？」

俺の態度にさらにヒートアップする百合だが、早いところ奈菜の父親に連絡を取らなくてはならない。ただでさえ電車の関係で時間をだいぶロスしてしまったのだ。これ以上遅くなっては今日中に話をできなくなる可能性もある。

まだ若干中身の残っているコーヒーのカップをゴミ箱に捨て、店の外へと出る。そして携帯をとりだし先ほどかけ損ねた奈菜の父親の番号を呼び出す。

「待ってください水野さん！！さっきからなんなんですか！！」

「いいから黙っていついてこい。今は詳しく説明してる時間が惜しい」

まだ何かを言いたそうだったが、それで百合はしぶしぶといった様子だが静かになった。それを確認した俺は呼び出した番号をダイヤルするのだった。

第３５話

～第３５話～

朝倉家に入るのは実質これが二度目だ。一度目は確か特売の魔力につられた奈菜が、買い物袋を６つも抱えて帰る事態に陥ったときだった。それを奈菜の家まで運んだのが一度目。なぜか俺が持つ量が４袋だったとか、次の日は筋肉痛になったとか、本当にたわいもない思い出。
出来れば今回もそんな普通のシチュエーションで訪れたいところだったのだが、世の中はまったくうまくいかないものだ。

「こんな時間にすみません」

「いや、気にしなくていい。面倒を押しつけているのはこっちのほうだ。私に出来ることならなんでも言ってくれて構わない」

現在時刻は２１時を回ったところ。あの後すぐに連絡をとったのだが、当然奈菜の父親は会社員。夕方はまだ業務時間の真っ最中。そこで仕事が終わるのを待ってから朝倉家で会合を行うということになったのだ。

「そちらの子は水野君の友達かい？」

「はい。今回の件に関してはあまり口外しない方がいいとは思ってますけど、協力者という人物がどうしても必要だったので」

「そうか、水野君が必要だというのなら。ただ…」

「わかってます。彼女以外には話していませんし、話すつもりもありません」

俺たちの会話に、半ば強引に連れてこられた百合はどこか居心地は悪そうだ。

「藤本百合と言います。すみません、関係のない私が…」

「いやいや、こちらこそすまないね。本当なら私が解決しなくてはいけない問題なのに、他人に任せるような形になってしまって……」

はじめて会ったときからこれで何度めだろうか、おじさんが自分を責めているのを見るのは。もっともここは何かを言う場面ではない。おじさんが言っていることは俺自身その通りだと思う。それなのにここで下手な慰めなどをかけるのは逆に失礼に価する。それでも協力すると決めた以上、助けになりたいと思うなら行動で示せばいい。

「奈菜はもう帰ってきていますか？」

早速本題に入りたいところではあったが、その前にもう一人、今回の本当の意味での関係者がここにいない。

「帰ってきているようなのだが、部屋にこもっているようで」

「呼んできてもらえますか？」

「今はそっとしておいてやれないか？私が言うのもあれだが、奈菜は相当参っているようなんだ。できれば家にいる間くらいは一人にしてやりたい」

それはお願いというより懇願に近いものだった。学校での奈菜の様子を見ればその言葉の意味くらい嫌でもわかる。無理していつもの笑顔を作り、必死で自分を演じようとしているのを見るはこっちの方が辛くなるくらいだ。

「だめです。何の話をするにしても奈菜がいなくては話になりません、呼んできてください」

「水野さん!?」

百合が驚きの声をあげるがそれを無視する。

「どうしてもかい?」

「はい。どうしてもです」

「わかった…、少し待っていてくれ」

おじさんは重い腰を上げリビングを出ていく。おそらく何をつれてくるまでは若干時間がかかるだろう。その間にこいつをなんとかしなくてはならない。まったく、つれてきたのは失敗だったな。

「どういうつもりですか?ただでさえ今日水野さんが練習に来なかったせいで落ち込んでるんですよ!?」

「だからだ。いいからお前は黙ってことの成行きを見てろ」

「ですけど!」

「奈菜のためを思うなら黙ってろ」

「…ッ」

実に卑怯な説得だとは思うが、今は手段を選んでいる場合ではない。神崎のあの様子では、今のこちらの手札では勝ち目はまったくない。百合とて納得はしているはずはないが、奈菜のことを思えばこそ、それ以上は何も言わなかった。

おじさんが席を離れてから３０分を過ぎたころ、ようやくリビングに戻ってきた。その間、俺と百合の間に会話はなく、部屋にかけてあった時計の音だけが響いていた。

「奈菜、早く座りなさい」

おじさんに促されて部屋にリビングに入ってきた奈菜の足取りは重く、俯いているため表情も読み取れない。学校では無理に明るく振舞っているが、家ではそれをするのも無理らしい。

「香介君に百合ちゃん……、わざわざ来てくれてありがとね」

それでも律儀に俺たちに礼を述べる。普段ならそんな奈菜に何か慰めの言葉をかけるだろうが今はそれをしない、するつもりもない。

「奈菜も来たところで、早速本題に入ります」

奈菜と百合もいる場ではあるが、ここは敬語で話すことにする。おじさんへの配慮という意味もあるが、何よりそうすることによって今から話すことへの重要性をあげるためだ。神崎は強敵だ。それをどうにかするためには俺一人の力ではどうしようもない。

「今日の午後、奈菜の見合いの相手、神崎祐介に会ってきました」

「彼に会ったのかい！？」

「ええ、アポ無しでしたけど奈菜のことについて話があると言ったらわりかし簡単にあってくれましたよ」

「そうか……、それならいいのだが」

さっきまで沈み込んでいた奈菜だが、俺が神崎に会ったと聞くと途端に目の色が変わった。それは百合にしても同じだったが、その驚き具合には違いがある。百合のは純粋に驚きだが、奈菜のそれには安堵のようなものが含まれている。

「そういうわけだから、別に行きたくなくて練習をさぼったわけじゃないから勘違いするなよ？」

「香介君……」

その一言で奈菜の表情は劇的に変わったと言ってもいい。本調子には遠く及ばないが、それでもさっきまで死んだような表情に比べたら十分によくなっている。

「この話はまた明日にでもしよう。今はそれよりも大事な話があるからな」

奈菜に向けていた視線をおじさんに戻す。

「無事に会えたのはいいのですが、ちょっと問題が起きました」

「問題？」

「ええ、俺と奈菜が恋人でも何でもないということがばれてしまいました」

俺は神崎とのやりとりの詳細を説明する。それを聞いた3人の反応は全部俺と同じ。こっちの対応にばれる要素はなく、それでもそこに確信を持ってたどりついた神崎は相当の観察眼と洞察力を持っているとということ。

現状こちらの持てるカードは何もなく、今から数日の間になんとかして神崎に勝てるだけのカードをそろえなければならないということ。

そして、誰もそれを口に出すことはなかったが、今のままでは奈菜の縁談を破談にする要因が何一つ見つからないということ。

その後も話し合いは続いたが、0時をまわったあたりでお開きとなった。何の対策もたてられないまま。

第３６話

～第３６話～

水曜日。創立祭での発表までは今日を含めて４日。加えて奈菜のお見合いまでは２日。絶望的に時間が足りない状況の中、俺はといえば再び神崎の会社を訪れていた。現在の時刻はまだ午前９時であり、もちろん今日も学校はある。今頃学校ではまた百合が怒り狂ってるかもしれないが、今は悠長に授業など受けてる暇はない。とにかくなんとかして状況を打開し、神崎にたしいて有利な立場を得なければならないのだから。

昨日とは違い、ビルの裏手にある通用口から中に入る。もちろん正面玄関と違い、警備の面ではこちらの方がきついのは当たり前なのだが、その辺のぬかりはない。警備員に名前を告げるとすぐに中へと通される。警備室の中にいたもう一人の警備員に連れられビルの中を進んでいく。確かに現時点で俺たちが神崎に使える手札は何もなく、さらにその手札を手に入れられる有効な手段も昨日の話し合いで得ることは出来なかった。だが別の手札なら持っている。有効な手段を得るための手札ならまだいくつか残っている。

「こちらです。中でお待ちになられています」

「ありがとうございました」

警備員は俺からの礼を聞くと、自分の持ち場に戻っていく。連れてこられえたのは昨日の応接室ではない別の部屋。一つ呼吸を置く。吸いこんだ空気が鼻腔を通り体内に入る。

―コンコン

扉をノックする音が廊下に響く。中から返答が返ってくるまでがやたらと長い。実際には数秒だが、その間にも心臓はずっと早鐘を打ち続けている。

「入りたまえ」

扉を開けたその先は昨日の応接室とは比にならないものだった。応接室に使って会った調度品はもちろんどれも一級品だっただろう。だがそれも、この部屋にあるものに比べればどれも見劣りしてしまう。別にその手のものに特別な知識があるわけではない、それでもその違いがわかってしまうほどにこの部屋は特別だった。

「今日はわざわざ時間をとっていただきありがとうございます。昨夜電話しました水野です」

俺の言葉に、部屋の一番奥のこれも高そうな机の後ろにいた人が振り返る。丁度部屋の窓が大きかったことと、その窓の位置が東向きにあったことで太陽の光が部屋の中には強烈に入ってきている。

「君が水野君か。私が神崎コーポレーション社長、神崎祐一だ」

太陽の光に一瞬目がくらむが、背筋を伸ばし視線をはずさないようにする。神崎祐一、神崎コーポレーション社長にして神崎祐介の父親。そして俺が手札を手に入れるための鍵。

失敗は許されなかった。

廊下側の一番後ろの席、そこが私の席だ。窓際と違ってどうして

も暗いイメージがある子の席だが、私はこの席が嫌いじゃない。むしろ気に入っているくらいだ。黒板に書かれる文字を機械のようにノートに書き写す。ここ数日の自分は、まるで人形にでもなってしまったかのように感情の起伏が乏しい。

―チラッ

視線だけを横に向ける。窓際の一番後ろの席は昨日の午後に続いて今日も空席。香介君のことだから、きっと今頃私のために動いていくれてるに違いない。いつだってそうだった。本人は意識してないんだろうけど、私が困っている時にはいつだって助けてくれた。だから香介君がバンド活動に参加してくれると聞いたときには飛びあがるくらい嬉しかったし、逆に昨日の放課後の練習に来なかった時にはお見合いのことを聞いたとき以上に悲しかった。

別に私は香介君の隣を望むとか、そんな贅沢を言うつもりはない。ただずっとみんなで笑いあえていたらそれでいい、それ以上を望むつもりはない。だけど今はそれが出来ない。うまく笑うことができない。

「奈菜さん、大丈夫ですか？」

いつの間にか授業は終わっていたらしい。どうやら私は香介君の席を眺めたまま意識を飛ばしていたようだ。百合ちゃんが話しかけてくるまでそれにすら気付かないなんて、本当に今の私はどうかしている。

「気分が優れないのでしたら保健室に言ったほうが……」

「大丈夫、授業にはちゃんと出るから」

「そう、ですか…。でも無理はしないでくださいね？創立祭はもうすぐなんですから、ここで体調を崩したら大変です」

そうやって心配してくれる百合ちゃんの言葉が今はすごく重い。今の自分は創立祭の練習に身が入らないどころか、関係ないことで迷惑までかけてしまっている。

私は、ただ創立祭での演奏を楽しくやりたかっただけなのに……

自分の席に戻って行きながら携帯をいじっている百合ちゃんの背中を見ながら、私は次の授業の用意のために机の中の教科書を取り出す。

―ん？

机の中に明らかに教科書以外の感触。私はどういうわけか、机の中に教科書以外の物をいれておくのが極端にいやだった。だからプリントなんかはクリアファイルに入れてきちんとカバンにいれておくことにしている。だけど今感じた感触は明らかにプリントの類、ぼーっとしてる間に間違えて入れてしまったのかと思い引っ張り出して確認する。

『昼休みに第3音楽室で』

今朝配られたどうでもいいようなプリントの裏にはそれだけが書かれていた。

一体誰が？

答えの見えない疑問は私の不安をさらにあおる。それでも、なぜか

この手紙の主に会ってみたいと思う気持ちが留のも事実だった。待ち合わせの場所が第3音楽室だったから。

第３７話

～第３７話～

正直な話、俺は人と会話をするのが苦手だと思ったことはない。むしろ得意だとすら感じているくらいだ。と言っても、この場合の得意と言うのは何もあれやこれやと話題を作り、初対面の相手とでも会話に困らない、とかおういうたぐいのものではなく、あくまで人に不快な思いをさせずにこちらのペースに巻き込み、うまいこと会話を終結させるといったものだ。そのおかげで過去何度もトラブルを切り抜けることができた。たいしたトラブルではなかったが、俺にとってはそれは大きな武器だった。

「まずは座りたまえ。手短に終わる話でもあるまい」

目の前に立つのは言ってみれば同じ人間。だが、その体からはそこしれない威圧感のようなものを感じてしまう。この人物、神崎祐一の前では俺の話術などまったく通用する気がしない。俺は自分が気圧されていることだけは相手に伝わらないように細心の注意を払いながら応接用のソファに腰を下ろす。昨日通された創設室のものよりも、格段に座り心地がいい。

「水野君だったね。知っているとは思うが一応自己紹介はすべきだろう。私は神崎祐一、神崎コーポレーション現社長であり、神崎祐介の父親だ」

ただしゃべっているだけのはずなのに、その一言一言が重い。これが何万人もの上に立つ者の威厳というものだろうか。

「今日は早い時間に押し掛けてしまい、申し訳ありませんでした。水野香介と言います」

それでも努めて冷静を装い言葉を返す。神崎社長の表情からはその感情の動きを読み取ることはできない。

「早速だが要件の方を聞かせてもらおうか。今日はそこまでスケジュールが詰まっているわけではないが仕事がないわけではないのでね」

さすがは親子と言ったところだろうか。息子と同じようなことを言う。

「お時間をとらせるつもりはありませんのでご心配なさらないでください」

言うべきことはしっかり脳内に刻みつけてある。切り返しの対応も何パターンもシュミレーション済みだ。

「単刀直入に聞きますが、息子さんのお見合いについてどう思われていますか？」

「ずいぶんと直接的な質問だな」

「僕の急な要求に応えてくれたんです。要件の方はわかりきっているでしょうし、余計な前置きなどは不要かと思ったので」

俺のような一学生が大企業の社長とそう簡単に話し合いの席を設けることなどできるはずはない。それも前日にアポをとるなど問題外だ。そこで俺が連絡を取るために使ったのが、奈菜の父親だった。

仮にも息子の縁談の相手の親、その人の頼みをそうそうむげに断ることはないと踏んだのだ。そしてその予想はずばり的中、そのおかげでこうして神崎社長と一対一で話ができているというわけだ。

「これもお分かりかと思いますが、奈菜の方は今回の件に乗り気ではありません。はっきり言えば、そちらの息子さんが一人で盛り上がっていると言ったほうがいいでしょう」

「続けてたまえ」

「お見合いの話が出て以来、奈菜の方は日に日に元気をなくしていっています。力を入れていた学校行事に対するモチベーションも、今では見る影もありません。それもこれも、息子さんの強引な話の進め方に問題があるかと思います」

正直、いますぐ帰れと言われても仕方ないようなことを言っている自覚はある。これは賭け、いや、もはや無謀と言ったほうがいいのかもしれない。それでもこの手段にでたのはやはり時間がないという理由からだ。残りの日数を考えると、正攻法ではどうやってもまにあわない。だからあえて相手側を悪者に仕立て上げ、良心の呵責にうったえようとしているのだ。よくある手だが、一番効果的であるのも事実だ。

「本来それを言うべきは朝倉さんの両親であるべきではないのかね？仮に事情があって来れないにしても、もう少しそれなりの人を寄こすのが筋だろう。少なくとも娘の友人というのはありえないことだと思うのだが？」

さすがと言ったところか、こちらの主張に対する反応は全く見せず別の切り口から逆にこちらを攻め立てる。無論、話の腰を折るよう

なことはまったくない。

「それはどの口が言っているんですか？」

だからと言って、それで動揺するような作戦を練ってきているわけではないのは当然ことだ。こんな切り返しは想定の範囲内だ。一晩という短い時間ではあったが、一時間に満たない話し合いのシミュレーションをするくらいには十分すぎるほど、このパターンももちろん想定済みだ。

「奈菜の父親はあなたの会社の取引相手、しかも優位性はそちらの方が圧倒的に上です。あちら側にしてみれば今回の話は渡りに船、うまくいけば神崎コーポレーションと対等関係にもっていける可能性すらある。そして逆もまたしかりです。そんな状況で奈菜の父親が自分の一存で断れるわけはない」

これが今回の件で一番大きな問題。これがなければすぐにでも解決するのだ。

「だから奈菜の父親はそう簡単に動くことができない。そこで僕が来ているんです」

「それでは質問に答えたことにはならないだろう。そんなことはこちらとて十分に理解している。私が聞いているのはどうして君なのかということだ。よもや君の中では他人の縁談に赤の他人が横やりを入れるのが常識というわけでもあるまい」

この問いも想定はしていたが、俺は答えを未だに決めかねていた。選択肢はふたつ、どちらでも話を続けるのに問題はない。

「僕がここに来ているのは……」

だけどそれの返答は俺の気持ちに大きな影響を与えることになるだろう。そしてこの先の奈菜との関係にも。

「奈菜が…」

答えは最初から決まっていたのかもしれない。でもそれを言うことに対するメリットとデメリットを俺は天秤にかけていたんだ。

「大切な……」

でもここはそんなことを言うべきところではない。ここだけは自分の本音をぶつけるべきなんだ。

「大切な親友だからです。親友が苦しんでいるのなら、それに対して何かをしてあげたいと思うのは間違っていますか？」

このとき俺ははじめて神崎社長の顔を真正面から見ることができた。そしてその顔に覚えていないはずの自分の父親の顔が重なったのは、どうしてなのだろうか。

第３８話

～第３８話～

昼休みまでの４時間の授業は今まで感じたことのないくらい長く思えた。もちろん授業に身が入るわけでもない。もっとも、ここ数日間の授業もまともに聞いていなかったわけだから、それはどうでもいいことなのかもしれない。人気のない廊下を走る一歩前の速度で歩く。第３音楽室はよっぽどのことがない限り人は誰も来ないのだから人気がないのは当然。これは推測だけど、そんなところが香介君のお気に入りの場所である所以なのだと思っている。

「…ふぅ」

音楽室の前に到着、そして軽く一呼吸。時計を見るが、まだ授業終了から5分もたっていない。

…滑稽だ。

こんなに急いで来ても、呼び出した相手も授業があったのだろうからまだ来ている可能性は低い。そもそも、これがいたずらだという可能性も捨てきれない。それでもこんなにも早く来てしまった。午前中はこの手紙のことしか考えられず、一時とはいえお見合いのことも忘れてしまうくらいに。

ただ単に、場所が第３音楽室と言うだけで。

扉に手をかける。最近ではよく開けるようになった扉だというのに、今日はそれがやけに重く感じる。気がつけば手にはうっすらと汗ま

でかいている。緊張しているらしい。そんな自分を鼓舞するために彼の顔を思い出す。今頃どこで何をしているかはわからないけど、きっと自分のために動いていくれているであろう彼を。

第3音楽室の扉がゆっくりと開く。扉を開けた際に流れてくる風がいつの間にか手のひら以外にもかいていた汗をひんやりとしやしていく。

「お、どうやら来たみたいだぜ」

「思いのほか早かったな。まだ授業が終わってから5分少々しか経っていないのだが。まぁ、その分話をする時間が増えるのだからしれはそれで良しとしよう」

すでに中には人がいた。それもその人たちは私もよく知っている人物。

「九条君…、七倉君…？」

そういえばこの二人はさっきの授業に出ていなかった気がする。教師も二人のサボリはいつものことなので黙認していたから気にも留めなかったが、それなら授業が終わって真っ先にここに来た私よりも早くここにいるのも納得だ。

「二人がここにいるってことは、私をここに呼び出したのは……」

「無論、俺たちだ」

どこかほっとしながらも少しだけ残念に思っている自分がいた。呼び出した人が香介君のはずはない。そんなことはわかっていたはず

なのに、どこかでうっすら期待していたのかもしれない。

「水野でなくて悪いな。できればあいつも一緒に呼び出したかったところなのだが、昨日のエスケープに続いて今日がボイコットのようなのでな」

「それでなんのようなのかな？私もあんまり暇じゃないんだよ」

考えを読まれてたことが気恥かしくて、少しとげのある言葉を返してしまう。やつあたりもいいところだ。

「俺たちとしては時間をとらせるつもりは毛頭ない。もっとも朝倉が俺たちの質問に素直に答えてくれればの話だが」

「私に質問？」

「そういうこった。香介の奴に聞いても何にも教えちゃくれないどころか、ここ最近は話すらしてないから問い詰めようもないんだよ」

七倉君の言葉を九条君が引き継ぐ。その顔にはいつものふざけた気配はまるでない。

「この前少し話はしたんだがな、水野からことの顛末を聞くまでにはいたらなくてな。なんでも今回のことについては自分が大元というわけではないから、と言われてはこちらとしても突っ込んで聞くわけにはいかないからな」

また香介君に感謝すべきことがひとつ増えてしまった。もちろん香介君が誰かに言いふらすようなことをするとは思ってはいないけど、本当に誰にも言わないでくれていたことをこうして実感すると、無

性にうれしくなる。

「あぁ、それから水野はその大元が朝倉であるとは一言も言ってはいないから心配は無用だ」

「それにも関わらず私にたどりついた七倉君にすごく不安感を覚えるんだけどな」

「ふ、俺にかかればその程度のことを調べるなぞ朝飯前なのだよ」

「一歩間違えば犯罪者だけどな……」

私も九条君に心から賛成したい。プライベートも何もあったもんじゃないよ。

「とにかくだ。水野が朝倉のために何かをしているのはわかっている。そこから先も調べようかとも思ったのだが、そこは本人に聞くのが一番だろうと思ったわけだ」

「軽い脅しだよね、それ？」

「人聞きの悪いことを言うな。あくまで俺達は質問しているだけであって、無理に聞こうとは思っていない。もっとも、朝倉からこの真相を聞けないのであれば自分で調べるしかないのだがな」

そう言って不敵な視線を送ってくる七倉君。ほんと、この人をいつも相手にしている香介君はすごい人だよ。なんて、人ごとみたいに思っている場合ではない。七倉君のこの口ぶりから察するに、きっと私がここで何も言わなくても自分で調べてしまう気がする。だからと言って事実を二人に教えてしまうのは、あまり気が乗るもので

はない。

「なぁ、奈菜ちゃん。そりゃ奈菜ちゃんにもきっと事情があるんだろうけどさ、俺達としても香介の力になってやりたいと思うんだよ。だからさ、詳しく話してくれとは言わないから香介が何をしているのかだけでいいから教えてくれないか？」

わかっている。九条君はただ純粋に香介君のことを心配しているだけ。七倉君だってきっとそうなんだろう。だけど香介君のことを教えると言うことは結局全部話すのと同じことになってしまう。

二人の視線と私の視線がぶつかる。

話すべきか話さざるべきか、私はどうしたらいいのだろうか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1775c/

Fragments of memorise

2010年11月12日11時22分発行